

目 次

巻頭言				
はじめに	会長	二神浩三	2 p	
シリーズ				
二神氏 人物伝	会長	二神浩三	8 p	
二神氏ゆかりの地を訪ねて				
由利島	常任理事	豊田 渉	1 2 p	
二神古文書の解説				
玉川町鴨部郡	事務局長	二神英臣	8 p	
系譜・家紋紹介	常任理事	二神信助	4 p	
会員さんからの便り				
	今治市	豊島信一	4 p	
	東京	二神泰次郎	2 p	
石像物が語る海民ロマン				
一石五輪塔から見た二神島		大成経凡	1 0 p	
芸予地震被災資料救出ネットワーク愛媛				
お知らせとお願い			2 p	
八幡浜と二神権之介				
	常任理事	二神重則	2 p	
地名で「二神」と呼ばれている所				
	常任理事	二神重則	6 p	
役員のつぶやき				
なぜ畑中に住みついたのか？	副会長	二神俊一	2 p	
想うところを、思うままに	常任理事	二神重則	2 p	
2001年 総会 記念講演	2001年4月22日			
「河野氏の時代と二神氏」				
愛媛県歴史文化博物館	学芸課長	石野弥栄	1 4 p	
二神系譜研究会会則			
二神系譜研究会役員名簿			
二神系譜研究会入会申込書			
編集後記			

はじめに

会長 二神 浩三



今夏は特別な猛暑の連続で、些か夏バテ気味でしたが、台風11号の影響で幾分涼しさを感じずようになって参りました。会員の皆様にはお元気でご活躍のこととお慶び申し上げます。

2001年4月22日の二神系譜研究会定期総会におきまして、再度会長をするよう仰せつかりました。浅学非才ながら当会の活動の原動力としてお役に立つべく努力する覚悟でいます。

この1年を振り返って見ますと、色々なことがありました。中でも最も印象に残っているのは、4月15日に北条市鹿島で行われた第一回全国水軍サミットに参加し、その後の明星川での水軍船引き大合戦に出場したことでした。二神系譜研究会速報No. 7(5月3日発行)にそれらの内容が詳しく報告されていますが、参加した元水軍は、熊野水軍、塩飽水軍、因島村上水軍、能島村上水軍、来島村上水軍、河野水軍、忽那水軍、松浦水軍と二神水軍でした。

二神水軍以外の水軍は誰しもご存じの水軍衆であったため、ここで何とか二神氏の存在をアピールする必要性を痛感し、他の水軍衆とは多少異なる作戦を練り二神水軍を紹介するレジメを配布し、来歴と当会の現状と将来構想までを述べさせて貰いました。

しかも、明星川での船引き大合戦には、櫂で船を漕ぐのが初めてと云う方や80才の方までが漕ぎ手ではあるものの、事務局長の計らいで、真っ赤の法被に黄色の襷、丸に一文字の家紋と二神水軍と書かれた鉢巻きを締め、船の艦には二神水軍の旗を靡かせ「ヤア ヤア 我

こそは二神水軍なるぞ！ 今を遡ることおよそ670年、藤原、豊田の血を継ぎ、二神島に定着せし者也。河野氏の家臣として、瀬戸内水軍の一翼を抱えり。海の民二神氏は今もなお健在にして、ここに、その団結の力を試さん。いざ出陣！ エイ エイ オー！」と口上も高らかに一斉にしぶきを上げて漕ぎ出しました。

多分当日の参加者には、海の民二神氏が認知して貰えたものと自負しているところです。しかし、まだまだ二神氏の足跡を顕彰し、瀬戸内の中世から近世にかけての歴史の中に定着するよう努めねばならないと今後の当会の活動を更に推し進める心算です。

一方、これまでに判明した諸情報を本会報によって会員の皆様に公開することによって、二神氏に関する認識を共有したいと幅集に骨を折っているところです。会報に対するご意見等あるいは学習交流会、総会等に対するご意見、感想、注文、質問などなどを寄せて頂ければ、会員自身の会報になるものと期待しています。

去る9月8日、9日には風早の二神氏の一部が、来島康親公(後に久留島氏)に随行して豊後森に渡ってから丁度400年になることを記念して、豊後森で二神氏学習・交流会を開催しました。九州にお住まいの二神さん、あるいは二神氏の流れを汲む縁者の方々、玖珠町、玖珠史談会、久留島会等多くの方々のご協力により、50名近くの参加者を得て盛大に執り行うことが出来ました。その際、史噴見学をさせて頂いた末広神社、安楽寺、成覚寺さんでは、手厚い心の籠もった歓迎を受け、参加者一同感動を新にしながら、初秋の玖珠を後にしました。

11月10日、11日には、大阪で関西・中部支部総会が予定されています。同地区の理事さん方のご尽力により、諸準備も整いつつあります。具体的には追ってご連絡を差し上げる予定です。沢山の会員のご参加をお待ちしています。

2001年9月11日はN.Y.,Wash.における旅客機ハイジャックによる同時多発自爆テロと云う前代未聞の悲惨事があり、国際テロと文明社会との新たな戦争が引起こされました。経済力や軍事力の強弱の差、貧困と富裕の差と云ったことから、弱者にとっては「窮鼠嚙猫」の手法しか残されていないのかも知れません。嘗て我国も特攻作戦を崇拜した時期もあり、苦い歴史を思い起さざるを得ません。人間とは？ の疑問を抱きながらも、懸命に生きることの価値を認識すべきではないかと思うこの秋です。

シリーズ 二神氏 人物伝

NO. 2
歌人、詩人、俳人

会長 二神浩三

二神氏は二神島に起源を有し、海の民として成長してきた一部族であり、小さな島に住む島人の暮らしを、より豊かにするためには、常に新たな生活の手立てを考え(独創性)、幾つかの選択肢の中から遠望深慮の上に決定し(先見性、計画性と決断力)、時を失せず実行に移し(実行力)ていかねばならなかったに違いない。私達はこれらを海民スピリッツと称し、現在の二神氏には大なり小なりそのスピリッツが継承されているように思われる。

このような考え方を基に、二神氏(養子として他家に移られた方を含む)の人物伝をシリーズとして記述してみたい。「海の民ふたがみ」の創刊号からこのシリーズが始められたが、今回は(歌人、詩人、俳人)を選んで記します。専門家でもないので多分に参考文献のコピーに近いことをお断わりしておきたい。

二神栗舎(くりや)(俳人、画人)

栗舎のことについては、「海の民ふたがみ」創刊号に二神英臣氏が紹介しているので、その補完を行って置きたい。先ずその生年と没年であるが、愛媛県史(人物)にも北条市史にも掲載されているものの、多少の差異が見られる。

(愛媛県史)(安永7年=1778年生、文久元年=1861年6月25日没83才)

(北条市史)(天明元年=1781年代、元治元年=1864年没、84才)

愛媛県史では栗舎(りっしゃ)とし、北条市史では栗舎(くりや)としていて、何れが真であるかは不明確であるが、「海の民ふたがみ」創刊号で、二神英臣氏は北条市史に基づいて栗舎の紹介をされている。私達は北条の地方で呼び慣れている「くりや」を採っているが、これは俳号であって、実名は、北条市史では丑の肋と云い、後に平策と改め、種亮と

も称したとしている。(創刊号参照)

愛媛県史では「実名は種亮、通称は牛之助、のち平策、鶴翁、禹港、柳蔭とも号す。先祖は二神丑之助といい、朝鮮征伐に従軍して加藤清正の虎退治にも参加したと伝えられている。」と記されている。似てはいるが、多少違っている。いざ、改めて記述しようとするとう不明なことを書くことが憚られる。そこで土居(土井)二神氏の資料を調べる中で、七代目に徳勝院鶴翁日寿居士 慶応二寅年=1866年六月二十五日(没年)と云う人が居られた。

以前から鶴翁という戒名からして画人か俳人ではないかとは思っていたが・愛媛県史の中の号鶴翁と一致し、死去の月日も一致することが分かり、土居(土井)、二神氏の七代目の人物であると判断される。しかし、没年は愛媛県史とも北条市史とも異なっている。県史にある文久元辛酉年は鶴翁の夫人が亡くなられた年に当たる。八代目は鷺野家からの養子で種長と云い、その長男が種成で、九代目の家督を相続している。したがって、『伊予史談2』の種亮の子供が種成としているのも誤りであろう。その誤りは、種長の没年が文久二壬戌年=1862で種亮の死去より4年前になることが原因ではないかと考えられる。

つまり、種亮(7代)―種長(8代)―種成(9代)となり英臣氏の記述を補完することが出来たように思う。しかし県史に書かれた栗舎の墓が善応寺にあると云う文言は、善応寺と云うお寺の墓地には無く、善応寺と云う地名があり、その地域の中の墓地であるかも知れず、未発見のままなので今後の調査に委ねたい。

種亮(栗舎)の系譜についての補完が長くなりましたが、栗舎は松山藩柳原の郷士で、生島足雄について学び、歌、俳句をよくした俳人である。また、画才も豊かで、幾らかの作品が遺されている。当時の俳句は正岡子規が生れる以前で、勿論その影響はうけていないが、「海の民ふたがみ」創刊号 24 頁に掲載された俳句を見ると、自然のなかの空気に浸りながら素直な心を描写した立派な俳句と素人ながら感心している。その中でも私の好きな句を二句だけ挙げておく。

「すゝしきは ころもかせの 楽寝哉」

「老楽の 静けさ引くや 夏の山」

《城辺二神家》

二神礼和（明治以降 二神深蔵）(号 淡水)

城辺二神家は初代正種から七代具種まで庄屋職にあった。礼和は八代目であって、長州征伐に民兵を率いて従軍し、郷士に取り立てられた。明治になって地租改正の郡総代理人となっている。また、山崎惣六や林有造らと自由民権運動にも参加した。城辺村初代村長として三期在任、県会議員となって副議長にも選ばれた。

若い頃外海浦内泊に来ていた、戯作者であり歌人としても知られた柳園(小沢)種春に和歌や俳句の指導を受け、自ら淡水と号した。

二神藤種（嘉(あやなり)）(号 回天)

深蔵の弟で、小沢種春に学び、各地に塾を開き門人三千と称せられた。「二神外記・内記」を編纂した。

二神駿吉（号 白雨）

深蔵の次男で、日本油脂、宇部興産などの社長、衆議院議員にも選ばれた。駿吉も白雨と号し、俳人としても知られている。



愛媛県南宇和郡城辺町常磐公園に立つ

深蔵翁頌徳碑

《堀舎二神家》



駿吉氏銅像

二神綱定 (永世(ながよ))(号 蘭園)

堀舎初代綱紀の次男で二代目となった。この綱定は「御荘の三歌人」と云われた一人の二神永世で、幕末から明治初期にかけて歌人として活躍した。他の二人は、永世の隣家の岡原常嶋と二宮(明治以降小幡)如水である。永世と如水は本居宣長の養子大平の門人で、如水は本居太平の門人である宍戸大滝と、内泊にいた小沢種春に教えを受け、歌集に「岩垣集」がある。

三代綱永も俳句をしていたと云われている。

二神胤永 (明治以降は彦一)(号 蘭庭)

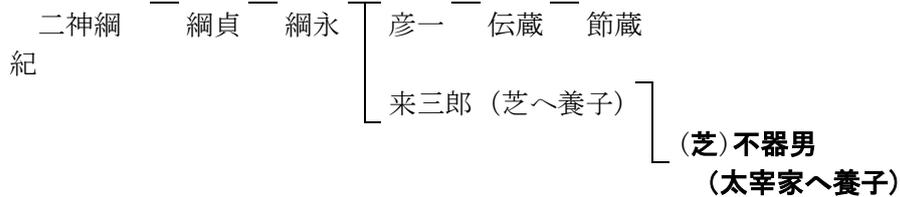
堀舎二神の四代目で、県会議員にも二度当選している。城辺の川の付け替え工事を本家の深蔵とともにに行い。現在の城辺商店街を作った人物で、彼も蘭庭と号する俳人であった。

二神伝蔵(号 蘭圃、後に碧堂)

彦一の長男で、城辺町長に選ばれ、俳人、歌人として知られている。歌集に「蘭」、「石壺」(半分は俳句)があり、石野義一らと歌誌「くさの葉」を創刊した。これは愛媛県下唯一の月刊短歌誌で・伊予・土佐の多くの歌人を育成した。夫人実千代も俳句、短歌を作り「湯鳴」の歌集がある。また、伝蔵の子節蔵も詩人、歌人として知られたが若くして亡くなり「節蔵遺稿集」がある。

芝 不器男

父来三郎は彦一の次弟で、松丸の庄屋芝家へ養子に入った。俳人で蜻州と号した。(以上の資料は郷土史家藤田儲三氏の「芝不器男の父来三郎の出自 御荘二神家について」から引用させて頂いた。) 藤田儲三氏によって整理された堀舎二神氏の系図では次のようになっている。





芝 不 器 男

芝不器男は明治36年4月18日、愛媛県北宇和郡明治村松丸で、父来三郎と母キチの五男二女の末子とし生れた。代々庄屋であったが、前記のように堀舎二神家には俳人が多く出ており、不器男の父も俳人であり、そのような家庭環境の中で育った。大正9年には宇和島中学を

4年で修了し、松山高等学校に入学した。その間学資を遠縁にあたる同郡大内村の太宰孫九から受けていた。大正12年、東京大学農学部林学科に入学したが、松丸に帰省中に関東大震災があり、東京へは帰らず、東大を中退した。大正14年には東北大学機械工学科に入学したが、その年の秋から「天の川」に投句を始めた。

松高時代には旅行部に入り、四国や信州の山々に登り、自然との触れ合いを楽しんだようである。

芝家に帰省した時には毎週土曜日の夜、句会を開いた。大正15年秋から「ホトトギス」に投句していて、その年の暮れに帰省したのを機に東北大学を中退し、芝家での句会を盛んにし、句作に没頭した。昭和3年太宰文江と結婚し、太宰家の養嗣子となったが、翌4年4月に病を得て、9月に九大病院に入院加療の甲斐もなく昭和5年2月24日に、満27才にも満たない短い一生に別れを告げた。

大正15年(24才)の作「**麦車 馬におくれて 動き出づ**」

昭和2年(25才)の作「**寒鴉 己が影の上に おりたちぬ**」

昭和3年(26才)の作「**白藤や 揺りやみしかば うすみどり**」

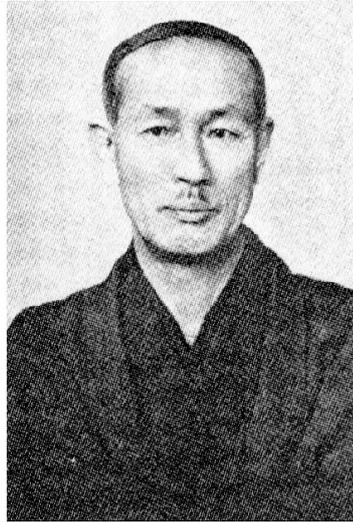
静と動あるいは動と静の空間にある間(ま)を、一瞬にして端的に表現している名句である。刈り取った麦を載せた馬車が、馬が動き初めてから少しの間をおいて動きだす情景、寒い地面に烏が自分の影の上に降り立ったと云う一瞬の光景、白い藤の花が風に吹かれて揺れ動いていたが風が止み揺れがとまったとき、その下から現われた藤の葉が薄緑であつ

たとえ、風の中の白い藤の花と薄緑の葉の変化の間を表現したものと
思われ、山深い郷での不器男独特の味わいを映し出している。

短い句作期間の間に、後世に残る俳句を多く残し、昭和22年に「芝
不器男句集」(現代俳句杜刊)が出され、1992年7月に「芝不器男句
集 麦車」(飴山 実編 ふらんす堂文庫)が出版されている。

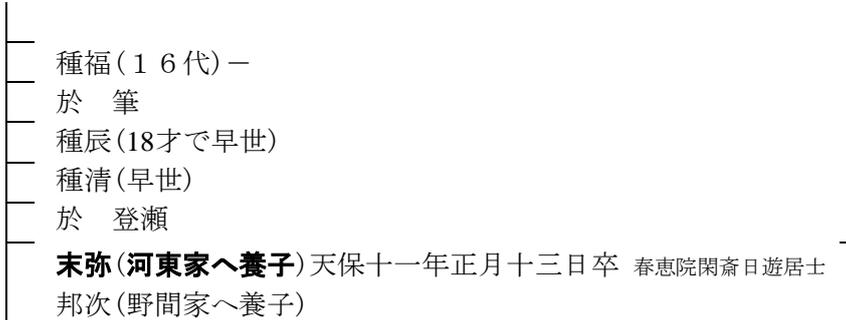
河東 碧梧桐

明治6年(1873)に松山藩士で漢
学者の河東 坤(号 静溪)の五男と
して松山市千船町に生れた。この河東
坤は、二神島の二神氏の携帯型系図を
明治21年5月19日に謹書してい
る。二神氏との関係は次のようになる。



河東 碧梧桐

二神種章(二神の元祖種家から15代目で、二神系図を最初に整理した人)



河東**虎臣**

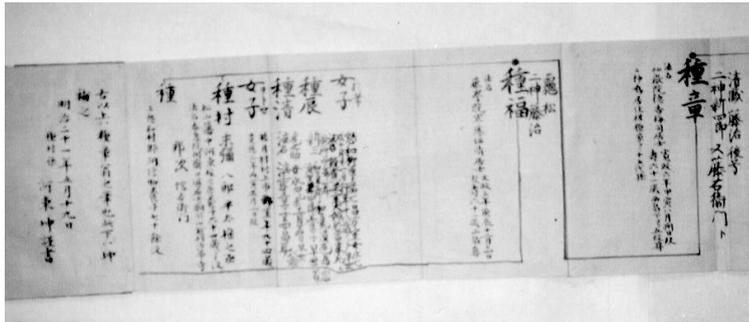
静溪

(松山藩士 明教館教授) (名は**坤**、字は子厚
明教館教授、千船学舎創始)

竹村黄塔(鍛) 母方の姓を嗣ぐ 俳人

可全(四男) 本名は銚(はかる) 通称秤四郎 俳人 子規と交友

碧梧桐(五男) 本名は兼五郎 俳人、書家



河東坤系図

明治21年伊予尋常中学校(後の松山中学)に入学、高浜虚子と同級となる。在学中、虚子らと同人雑誌「同窓学誌」を書写回覧したり、能の真似事をしたりの多彩振りを発揮した。明治22年に先輩の正岡子規にベースボールや俳句を学び、23年中学3年で俳句集を作り子規の添削を受けた。同26年京都の第三高等中学に入学、虚子と同じ下宿で学生生活を送った。同27年に仙台の第二高等中学に転学したが、退学して子規を頼って上京した。明治29年には新進俳人として虚子とともに子規門下の双璧と云われ、「ほととぎす」や雑誌、新聞などの俳句選者として活躍した。子規没後、進歩的な句風は虚子の守旧派と対立していった。その後全国各地を遍歴し、紀行「三千里」、「続三千里」を著作した。自己の生活のありのままを自然の中に直写し、自由で天真流露の俳句を

唱え、自由律の句を広めた。

明治35年の作「三津の浜や浪も立たなく天の川」三津浜港

明治36年の作「元日の雪降る城の景色かな」松山城公園

大正6年の作「親子連れが下りて来る雲に打たれたる顔」石鎚山

大正13年の作「さくら活けた花屑の中から一枝拾ふ」松山市二番町

松山市鷺谷墓地に佇む碧梧桐の石碑



参考文献

愛媛県史 人物

伊予路の河東碧梧桐 文学遺跡散歩

鶴村松一著 昭和53年4月10日 松山郷土史文学研究会

二神島本島二神系図携帯版

芝不器男句集 表車

飴山實編 ふらんす堂文庫 1996年9月1日 二刷発行

二神氏ゆかりの地を訪ねて

№. 3 由利島 (愛媛県中島町)

常任理事 豊田 渉



南東上空より見た由利島



◆沈んだ島？

「昔々、由利島には人がいっぱいおったけど、ある時災害があつて沈んで今の形になったそうなの。」というような話を小さい頃から聞かされていた。由利島は、私の生まれ育った二神島からは、真南に2里、二神港からだと3里ほどあるのだと、子ども心にも覚えていた。伊予灘にぽっかりと浮かび、周囲にさえぎるものはなく、それがまた神秘性を増しているような感じを受けているようだ。飛行機から見たときにはその様子が特にわかるような気がする。空から見る機会があつたら注意をして観察していただきたいと思う。

由利島が沈んだのでは？とされるような言い回しに、「水無瀬千軒、由利千軒、なかの情けが十二軒」というのがある。千軒は大げ

さでも、いくらかの人家はあったかもしれない。沈んで今の形になっているのだと言いつたされているが、定かではない。「～千軒」とは、かつて栄えていたけれども消え去っているところに付けられる名称のことには違いない。水無瀬とは、山口県屋代島の南の海上にある水無瀬島（大水無瀬島と小水無瀬島）のことであり、由利とは二神島の南8 Kmにある由利島のこと。そして、情けとは同じく屋代島の東にある情島のことである。現在では、情島以外、無人島になっている。

この由利島のことについては、山陽新聞社の吉沢利忠氏が昭和54年（1979）10月15日から20日までの6日間、新聞に掲載している。その後、「瀬戸内のミステリー沈む島消えた町」として発刊されている。

本当に由利島は沈んだのであろうか。そのヒントになるのかもしれないと思われる文書「由利島縁起書」が、松山市の儀光寺（二神瑞隆住職）に残されていた。昭和48年（1973）6月16日に儀光寺を訪ね先代の二神瑞巖住職に伺った時、「この縁起書は、何かの書き写したものであり真偽のほどは判明しない。また、寺には他の古文書は残っていない」ということだった。



由利島縁起書（左）



儀光寺絵図（下）

その『儀光寺縁起書』によると、「天平年間（729～748）儀光上人が由利島山腹の平坦部に行基菩薩による一丈四尺一寸の十一面観音像を祭り一草庵を作った。弘安年間（1278～1281）に地震津波の害を受け、由利千軒の所在を消失。

住民は三津浜の刈屋（現在、松山市古三津）に移住し儀光寺を建てた・・・となっている。儀光寺は、真言宗で真隆山仏集院と号し、御本尊、釈迦如来、阿弥陀如来、仁王門等は、弘安年間に由利島より移し再建したと伝えている。

松山市高浜町の人々は、先祖から「島人は寺のそばの空き地に住んだが、後に漁業に便利のように、西へ数百メートル離れたカヤの原を刈り村落を作った。そこを後に苧屋村（現・松山市住吉町1丁目）と呼んだ。その後、苧屋村から3Km離れたところに新苧屋の村をつくった」と語る。その新苧屋村が現在の松山市高浜町3～5丁目あたりである。儀光寺の檀家の大半は、元の苧屋と新苧屋にある。この新苧屋の漁民とは、由利島をめぐるの大騒動があった。これは、別に述べたい。私自身が由利島へ最初に上陸したのは昭和45年（1970）である。そのときは、島にある唯一の砂浜で食事をして楽しただけであった。それから数年後、私は二神島や由利島のことについて調べるようになった。中でも、前述したように儀光寺を訪ねたことや長崎の県立美術館で瀬戸内海図屏風（江戸時代のもの）の中に「二上（神）」と「ゆり」の文字を見いだしたときの記憶はまだ新しい。

◆由利島とは

由利島は、愛媛県松山市の北西約20Kmの海上「伊予灘」にぽつんとある周囲約4Kmの小島である。大小2つの島は大由利と小由利と言い、州で結ばれる典型的な陸繋島を成している。州は鶏卵や握り拳大の小石ばかりであり、砂浜は大由利の南西に1ヶ所あるだけだ。最高峰は大由利の194mであり、地図でみるよりはるかに急斜面である。

古くから人が住んでいたと思われる遺物も見つかっている。大由利からは平安・鎌倉時代のもの。小由利の港（元は池であり、海軍が一部を切り開いて港に改修した）からは、弥生時代中期のものが出土している。近年では、明治の初めから昭和40年代まで、入れ

替わりながらではあるが二神島の人たちが住んでいた。

由利島の周囲はいわし網の好漁場で、江戸初期から昭和30年代まで漁を行っていた。寛文2年（1662）より山地は肥草山（田畑の肥料源）として、海浜はいわし網の好漁場として二神島はもちろん、安芸備後地方などの人も出入りして利用するなど、有名な稼ぎ場となっていたようである。元禄16年（1702）には無人島であったらしい。寛文4年（1664）に松山城尾谷の鹿10匹を放ったとの記録があり、さらに享保12年（1727）に松山藩主が鹿狩りをしたともある。寛政8年（1796）の「懐中万年鏡」には、『油利嶋回り壱里七丁、二神嶋より三里勝成公御代鹿御放湊内雛網代御運上壱貫目ツ、年々免上、山ノ分伊予郡肥草山ニ替、夫ヨリ玄米二百五十俵、清名北代官所へ御預ケ』とある。



大由利中腹より小由利を望む
由利島唯一の砂浜

明治11年（1878）の地誌下調べには「・・草蔓延し島民わずか2戸男女皆農を業とす」とある。二神島で食い潰した者が、交際費がいらぬので移住して生活したといういわゆる「困窮島」であった。明治41年（1908）の二神島漁業組合の資料では「由利島5戸26人」とある。大正元年（1912）の夏火災が発生し防風林の松が焼失。さらには、昭和15年（1940）7月4日下場付近より出火し、当時の漁協の施設全部が焼失したが、由利神社神殿は類焼を免れた。大鳥居はその年の9月3日に建立された。昭和16年（1941）には16戸の常住者があり、夏のいわし漁期にはさらにこのうえに二神島から70～80戸の移住者が加わり活況を呈していた。この頃、山頂に軍の監視哨が設けられ軍人が駐屯した。その間だけは、水道や発電施設もあったが、終戦とともに撤

去された。それを物語るものは、井戸と発電機の置かれてあった基礎、兵舎の跡くらいであるが、現在は草木に覆われていて井戸以外に見つけることはかなり困難である。昭和39年（1964）頃には、みかん栽培や漁業のためにしばらくの間は滞在する人もあったが、冬を越す人はほとんどいなくなっていた。何回かの火災に見舞われ、最良の漁場を誇っていたけれども、若者の減少や不漁続きのために寂れてしまった。昭和初期がいわし網漁の全盛期で、当時は浜に10基を越す釜場があったという。出耕作で二神島から通っていた人たちが数人いたが、平成3年（1991）9月の台風19号以来、通うことはなくなっている。

◆「由利千軒」の謎

由利千軒に関する、謎めいたものを少し列挙してみたい。

【百合嶋録の記述】

二神家文書の中に安永7年（1778）の『百合嶋録』がある。前書きには、「二神新四郎種章旧記ヲ以記録之ス後代追々可書継事」とある。そして、「・・俗ニ右嶋今之大山の方を小由利ト言、今之小山の方を大由利ト言、又油利千軒トテ往古ハ人家千軒有之候之由、至今ニテ申伝也事、地震ニ崩タルヨシ・・」とある。つまりは、「現在の大きい島は元は小由利と言ひ、小さい島は大由利と言っており、地震で崩れた」というのである。

もう少し詳しく紹介してみると、『百合島（由利島）は2つの島の周囲が4.7Km、東西2Kmにわたる。全山草山で、昔から二神島の小島（属島）で磯も山も村方かせぎ第一の場所だ。島には矢立大明神があり祭日は6月17日。ほのき寺屋敷という二神村安養寺所有の寺屋敷がある。本尊の毘沙門天像は百合島全盛のとき同島に安置していたが、のちに廃寺になって、安養寺境内にお堂を建てて引っ越しし安置した。百合島には寺屋敷、長者屋敷、船頭畑、鍛冶屋の尻などという地名を今も言い伝えており、神社や仏閣もあって、昔に栄えていたに相違ない。二神村へ引っ越したのはいつかわからないが、俗に大山の方を小百合、小山の方を大百合といい、昔は人家千軒あったが、地震で崩れた』と申し伝えている。二神島の安養寺の火災は、近年の記録にあるものでは、寛延4年（1751）、宝暦6年（1756）とである。しかし、現在の安養寺に『百合嶋

録』で言う毘沙門天像は見当らないのである。

【弘安年間中の災害】

弘安年間（1278～1287）に、地震津波の害を受けて住民が避難したとある。その当時に西日本を揺るがすような地震・津波など災害の記録が今のところ見つからない。かなり大きなものであれば、どこかに記録されているはずであろう。

地震年表によると、文化9年（1812）3月10日、慶安2年（1649）2月5日に起った地震が松山市などに被害を与えているが、遺物や伝承の年代とかなりはかけ離れているのだ。

二神島の中村勝美さん（故人）の話によると、昭和24年（1949）6月21日のデラ台風で由利島が襲われ、大由利と小由利を繋いでいた砂州が切れたという。災害は、台風だったのだろうか。

【由利島に残る地名】

由利島には今も、「寺床」「長者屋敷」「鍛冶屋が尻」「船頭畑（千反畑）」「お舟に申し」など往時の賑わいを思わせるような雰囲気の地名が残っている。

今の大由利の中腹にある「寺床」に以前訪れたことがあるが、約1500㎡の平坦地であった。当時、中村勝美さんがみかん栽培をしていた場所であるが、みかんの苗木を植える時すでに平坦地であったという。戦時中は、軍が駐屯し兵舎があったところでもある。今も兵舎の一部であるレンガが残っている。



儀光寺があったとされる「寺床」



兵舎の跡の部分（寺床）

【海中の井戸】

昭和53年（1973）大由利の南西沖の約100m、水深10mくらいのところに、一辺が2.5m角の石造りの井戸らしきもの

を地元の漁業者が見ている。

【牡蛎の付いた石】

大由利で井戸を掘った時に、地下5mくらいのところから、牡蛎の付いた石がいっぱい出てきたという。そこがかつて、海だったということなのだろうか？。

【遺物の年代の違い】

小由利の港にある海底遺蹟から出土するのは決まって弥生中期のもの。大由利からの出土物は、平安・鎌倉時代のものばかり。ここに1000年ほどの食違いがある。そして、「寺床」「長者屋敷」からは今のところ何も出ていない。

などなど。必ずしも明らかではないにしても、由利島が沈んだのではという一部分を垣間見るような気がする。



由利島の港
奥は由利島遺跡

◆由利神社

平成8年（1996）3月神奈川大学建築史研究室より出されている「由利神社について」を引用して記してみたい。

私の知っているかぎり、昭和47年（1972）頃には、少し倒れかけていたが由利神社の鳥居（木造だった）があった。鳥居のすぐ近くにのぼり旗を立てる石柱があり、西に向かって参道を行くと三方を石積みで囲った中に本殿があった。本殿は、安永4年（1775）に再建され、明治12年、23年、昭和25年、28年と修理を繰り返してきたことが、棟札や奉納札によって明らかとなった。

本殿の構造などについては詳述しないが、前述の年代別に記してみたい。

1. 本殿内部奥板壁墨書

本殿の扉には、二神家の紋である「丸に一文字」がはっきりと見える。内部の奥板の壁には墨書きで、「奉再建立百合嶋矢立大明神社 一宇鯛網大漁諸難退除如意満足祈所 干時安永四乙未年九月大吉辰」とあり、安永四年（1775）に再建されたことがわかる。建立願主は「一建立願主二神嶋之住庄官 二神新四郎藤原種章 同嫡二神藤治藤原種福」とあり、「庄官」と記載されている点が注目される。

このことについては、元文六年（1741）と明和五年（1768）に郡や藩によって由利島が二神村の住人の手から取り上げられそうになり、そのつど新四郎を中心に抵抗を行ったという経緯が二神家文書にある。このような事件があったからこそ、自らを「庄官」と記し、二神家の紋章を刻み由利島の権利を主張したと考えられる。



由利神社内部
(矢立大明神社)

鳥居と石柱
(奥が本殿)



本殿



2. 明治12年（1879）奉納札

表に「由利神社」

裏に「明治十二年己卯九月吉日再建 祭主 桑口重」と記されている。（註：祭主は桑原ではないか）

3. 明治23年（1890）棟札

表「奉再建矢立神社一字海上安全漁業満口 明治廿三年 旧八月吉祥日」

裏「大字二神村安養寺留守居 菊沢徹玄、大工 風早郡辻町渡部菊次郎、左官 竹内徳三郎」とある。風早郡辻町とあるところを見ると、大工は、北条市から呼び寄せているようだ。

4. 昭和25年（1950）奉納札

表「油利神社社殿修理 昭和貳拾五年七月貳拾二日」とあり、二神島の寄付者10名が記されている。最後に「発起 油利氏子中」裏は記載なし。

5. 昭和28年（1953）奉納札

表「由利神社 屋根葺替、昭和二十八年十月八日、大工 矢野恵前田光房 前田忠義左官 竹内松次郎」

裏「発起 二神漁業協同組合」とあり、関係者8人の名前が記されている。

◆由利島騒動

二神島の人は“高浜戦争”、高浜・新荻屋の人は“二神戦争”と今も語り伝えられている。由利島周辺の激しい漁場をめぐる争

いで、明治の初めから明治40年（1907）まで、親子二代にわたって続いた。発端は、カワハギ漁だったともアビ漁だったとも言われる。

お互いに漁民たちは、双方の家におしかけて放火したり舟を壊したり転覆させたりが、何度となく繰り返されたという。由利島近くで操業中に襲われたり、二神島の人が松山市沖の興居島へ行って襲われたこともあったそう。今ではいろいろ伝わっている話がどこまで本当なのかは調べる術もないが、高浜にしても二神にしても由利島周辺の漁場がすぐれていたことの証であったのだろう。それは、江戸時代に紀州をはじめ、伊吹島（香川県）、白石島（岡山県）、鞆（広島県）、岩城島（愛媛県）から出漁してきていたことにも伺い知れる。争いは明治40年（1907）新苧屋の漁民が二神島へ入漁料を払って操業することで決着したようである。

ただ、ここで興味深いことが1つある。明治37年（1904）2月に由利神社へ石柱が、新苧屋の住民と二神村の住民30人ほどの名によって寄進されている。由利島騒動が決着する3年前の記述である。



由利島遠望

◆今どきの由利島

いずれにしても謎とロマンに満ちた由利島。考えれば考えるほど頭がこんがらがってしまいそうになる。かつての瀬戸内海は海上交通の要衝であり、海を渡って行くほうがはるかに陸上に行くよりも

早かった時代が確実にあったのだ。人々は広い海を行くとき、点在する島々を目標にして航海をし、由利島もその1つであったに違いない。

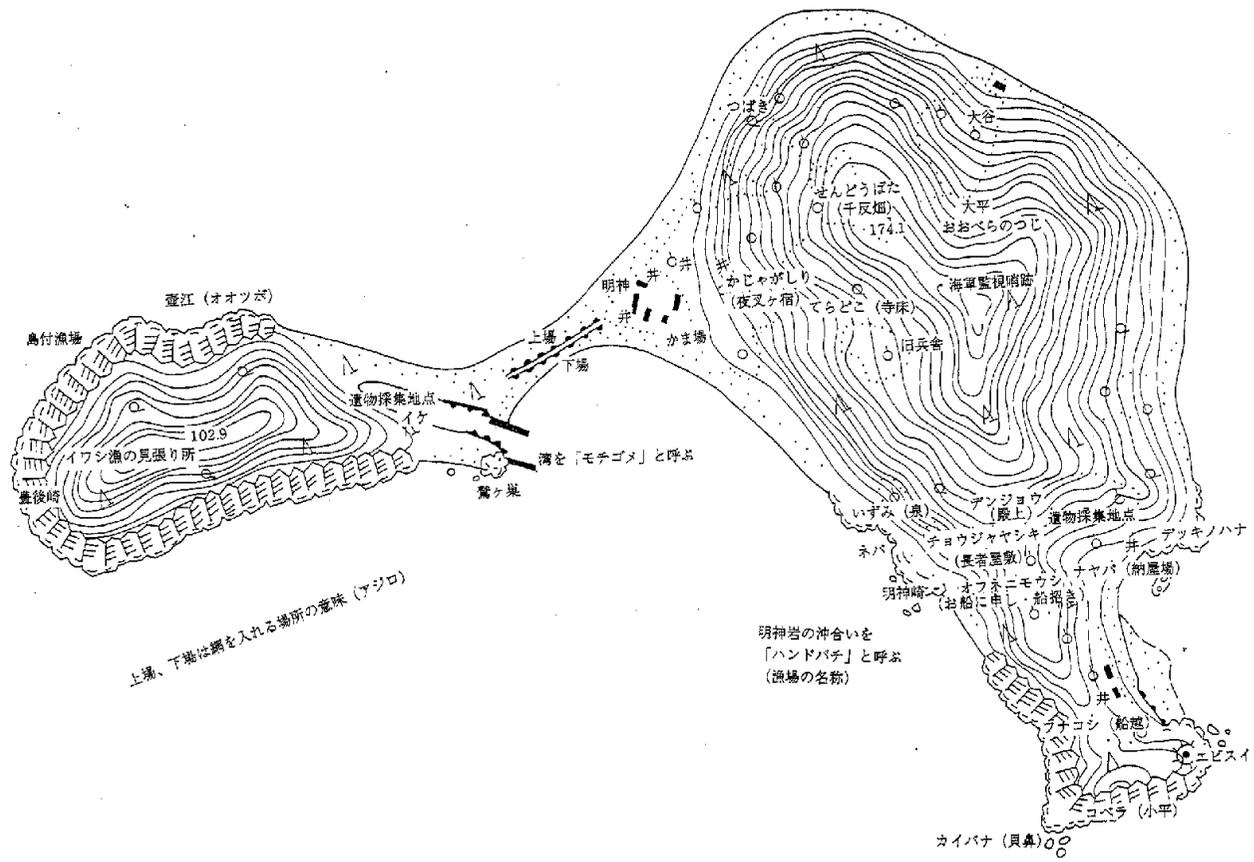
由利島に降り立った時、本当にこの島が沈んだのだろうかとも考えてしまう。弘安年間に災害が起きたときに、なぜ住民は二神島のほうへ避難せず、古三津のほうへ行ったのだろうか。そのころに、二神島の住民は由利島をどう見ていたのだろうか。なぜ、沈んだという言い伝えが残っているのだろうか。などなど、思いは尽きない。

近代の由利島は、銅の精錬所の候補地となったり、戦争の施設が設置されたり、リゾート整備の候補として注目されたりしてきた。別の面では、「無人島」ということから、青少年のためのキャンプの場として使われてきたし、釣り客の格好の場所としての存在をも印している。

今はもう誰もいない由利島。いろんな人々の生きざまを見続けてきたことだろう。そんな中で、唯一、真実を知っている由利島は今日も伊予灘にぽっかりと浮かんでいる。

参考資料

- 吉沢利忠「瀬戸内のミステリー 沈む島消えた町」
- 神奈川大学建築史研究室「由利神社について」
- 愛媛県中島町「中島町誌」
- 堀内統義「愛媛の地名」



上場、下場は網を入れる場所の意味 (アシロ)

明神岩の沖合いを「ハンドパチ」と呼ぶ (漁場の名称)

壺江 (オオツボ)

高付漁場

102.9

イワシ漁の見張り所

壺後崎

運物採集地点

湖を「モチゴメ」と呼ぶ

鷺ヶ巣

明神井

かま場

かじゃがしり (夜叉ヶ宿)

てらご (寺床)

海軍監視哨跡

旧兵舎

せんどうぼた (千反畑)

174.1

おおべらのつじ

大谷

大平

つば

いずみ (泉)

アンジョウ (殿上)

運物採集地点

デッキノハナ

チヨウジャヤシキ (長者屋敷)

ネバ

ナヤバ (納屋場)

オフネニモウ (お船に申し給物)

羽神崎

アチコシ (船窓)

井

小平

コベス

カイバナ (貝鼻)

事務局長 二神英臣
史料部 豊島信一

宅並二神衆と鴨部郷

今回は河野氏から二神氏へ出された「安堵判物」の中で、北条市粟井地区の安岡、友兼（友包）、宮崎（宮前）の三地区について、二神氏になぜこの地区を安堵したのか、その理由や当時の時代背景を現地を訪ねながら推察する形で紹介してきました。その後、会員や読者の数人から感想やお便りを頂きました。「今まで二神古文書の存在は知っていましたがこれほど身近に古文書の内容を解説し、紹介をして頂いたことにより、さらに二神氏の歴史が生きたものとして感じられるようになりました」との感想も頂いております。

幸いなことに、今年春の総会で愛媛県歴史文化博物館の石野弥栄氏から「河野氏の時代と二神氏」のテーマで記念講演を頂きましたが、その中でこの時代、河野氏がとった政策や動きなどについて、二神文書を紹介しながら詳しく説明をして頂いておりますのでご覧下さい。（本号掲載の記念講演録を参照）

さて、本欄では今回、二神氏の歴史なかでも注目をされている「衆」=の内、「和気郡と風早郡の境目付近の海辺部にあった宅並城を防衛する二神氏の集団」（石野弥栄氏）であった「宅並二神衆」を取り上げて紹介をします。

二神氏に三つの流れが存在

石野弥栄氏は記念講演のなかで、「二神氏における〈衆〉の形成と役割」との項目を立てて「宅並二神衆」について次のように述べています。「二神氏は風早郡で多くの領地や強力な権限を与えられていましたが、もう少し注目すべき点は、二神氏において「衆」が

形成されていることです。」と述べ、永禄13年（1570）来島通康の死後、来島氏の当主となった牛福丸（後の通直）が室町幕府に背いたため河野氏は二神氏に来島牛福丸への対面禁止、風早郡における新領地の給与の約束を命じましたが、このとき、河野氏から二神氏へ発した命令文書が二神修理進、二神隼人佐、宅並衆中の三者に宛てられていることに注目をしています。

これまでに明らかにされてきましたように、二神修理進は後に来島氏と行動を共にし、豊後森へ移っていった人物の系譜。隼人佐は善応寺で絵図が発見された二神通範。そして宅並衆中とは、和気郡と風早郡の境目付近の海辺部にあった宅並城を防衛する二神氏の集団で、宅並城の麓の小川村を中心に、磯之河、粟井川流域の安岡、友兼、宮崎にかけ、海浜部はもとより、横山城や湯築城の背後に続く陸の要衝を守る役割を持っていた集団のことで「宅並二神衆」と呼ばれていました。

そして二神諸氏に命令が下された直後、河野氏は、二神隼人佐、二神修理進にそれぞれ同文の命令書を出して粟井内の領地を安堵していますが、それには「衆中可申談也」との文言が付されており、二神各氏と宅並衆とが申し合わせを行い、一族が結束して対応している様子が読み取れます。



宅並二神衆の墓石と見られる五輪塔
(北条市小川)



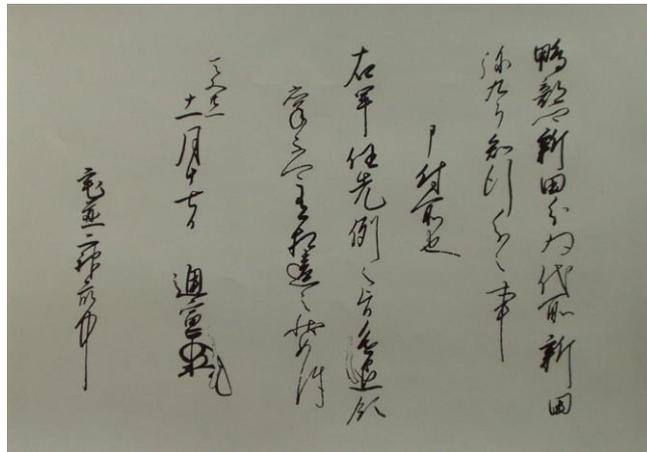
二神信濃守と家来の墓石
(北条市磯河内)

宅並二神衆へ河野通宣からの安堵判物

このように宅並二神衆は風早郡で強力な軍事集団として、また平時にあっては瀬戸内海周辺の海での漁業や農業技術の発展開発にも力を尽くし、そのような技術力を持っていたように考えられます。

その宅並二神衆に対し「衆中可申談也」との表現を持った河野氏から発令された文書は他にも多くありますが、もう一つ、天文21年（1552）宅並二神衆宛てに単独で出された河野通宣（左京大夫）からの安堵判物があります。

鴨部郷新田分、為代所新田称九郎知行分之事
申付所也
右早任先例之旨、進退領掌不可有相違之状如件
天文二十一年十一月十七日 通宣（花押）
宅並二神衆中



宅並二神衆への安堵判物（東大史料編集所蔵）

鴨部郷新田は蒼社川沿いの外新田を特定

これは河野通宣が天文21年11月17日付けで発した安堵判物で、宅並二神衆に対して越智郡鴨部郷（かんべごう・現在の愛媛県越智郡玉川町小鴨部）の土地の支配することを認めた書状ですが、二神古文書の中でも、当時の時代背景を考える上で非常に貴重なものと云えます。

それでは、最初にこの安堵判物の内容について検討を加えて見たいと思います。

「鴨部郷新田分」と初めに述べられている部分は、そのまま鴨部郷の新田（しんでん＝新しく開墾をした田）と読めば良いと考えます。その場所について、現地を訪ねる中で特定をしてみました。安堵判物に云う「鴨部郷新田分」に該当する地域として、現在の越智郡玉川町小鴨部に外新田と云われる地域があります。そこは玉川町上流の北三方が森に源流を発した蒼社川の堤防に沿った5万^石程の三角形の砂地の多い地域で「水止まりが悪く米作りには向かない土質」（地元の農業関係者）と云われ、これまでも度々蒼社川の水害に出会った土地です。その水害の証として、蒼社川が洪水となったとき、ここにあった神社が下流の川口の蔵敷邑まで流されました。

「鴨部神社は蒼社川上流の鴨部郷から洪水によって流失し、ここ川口付近に流れ着いていたのを、蔵敷邑の里人が拾い上げて祭祀したのではなかろうか」（『河野氏ゆかりの地をゆく』風早歴史文化研究会、平成13年7月10日発行）と述べられ、鴨部神社が下流の現在の今治市蔵敷町にあることから理解できます。

「字外新田（あざそとしんでん）ハ村ノ北方ニアリ東ハ字梅ノ木ニ隣リ西北ハ蒼社川限り東西貳町五間南北壹町三拾間」「新田溝（しんでんこう）拝志溝ノ派流、村ノ乾位字新田拾八番地ニ起リ、北方同字拾壹番地ニ至リ別府村ニ入ル、長三町五拾四間幅四尺、拝志溝ノ養水ヲ補助ス」（『伊予国越智郡小鴨部村地誌・明治13年刊』）

このように「鴨部郷新田分」と安堵判物で述べられた地域については、今までのところ他に該当する地域が無いことからこの地域を

特定をしても良いのではないかと思います。



玉川町小鴨部にある外新田

蒼社川堤防と鴨部郷外新田

新田弥九郎は新田族の系譜につながる人物

次に「新田弥九郎」なる人物について、これまで手がかりになるものは何も発見されていません。安堵判物が発せられた天文21年11月当時にこの地域を支配し、治めていた新田弥九郎が河野氏の家臣団の中でどのような役割を果たしていたのでしょうか。南北朝の頃、南朝側の脇屋義助が伊予国の総師として新田族を従えてこの地域に入国してきましたが、「新田弥九郎」はその新田族の系譜に関わる後の人物なのかどうかさえも判明できていないのが実態です。ただ、新田系図に「又、新田・脇屋二氏に子孫及び随従二十七士の子孫、河野・土居・得能の家に属し予州に住し采邑若干を領す」（『南北朝史・新田の旗風』秋山英一・片山才一郎共著P487）とあり、この中で「善応寺文書」「二神文書」に現れた新田族の存在について触れている（同書P488）ことから「新田弥九

郎」なる人物が新田族の子孫であることも考えられます。これに対し「新田弥九郎」が新田族の子孫ではなく、他の新田系譜であることを証明する史料や論文も現在までのところ確認されていません。いずれにせよ伊予の中世史の具体的解明はまだ時間と研究が必要だと云えます。

河野通宣が宅並二神衆に来島通総を監視させて圧力

しかし、この文書で最も重要な意味をなすところは、天文21年当時の時代を背景に、なぜ宅並城が位置する風早郡小川村を中心にして活動していた宅並二神衆に対して、遙か遠く離れた越智郡鴨部郷の地を知行する必要があるのかと云うことであろうと思います。

天文21年（1552）の伊予国は、河野家内紛の和議成立後家督を相続した道後湯築城主河野通政（晴通）が天文12年に早逝し、その跡を継いだ弟通宣の時代になっていました。この頃河野氏の武将の中にも背く者も現れ浮穴郡に勢力を有した大野氏や久米郡の和田氏などは河野氏の重臣を襲ったり自立を企てたためこれを鎮圧しています。一方、中国地方を支配していた大内義隆は天文20年9月家臣の陶晴賢に襲われて長門国大寧寺で自殺し大内氏の支配が終わりを告げていました。毛利元就の登場までまだ時間があり、今川義元、織田信長が戦った桶狭間の合戦まで8年前のことです。

このような状況を背景にし、二神文書の中でも突如として天文21年11月17日付けで発令された遠隔地「鴨部郷」への知行権は一体どのような意味合いを持つのでしょうか。



宅並二神衆が拠った宅並城を遠望

愛媛県歴史文化博物館の石野弥栄氏はこの「宅並二神衆」について「和気郡と風早郡との境目付近の海辺部にあった宅並城を防衛する二神氏の集団」（「河野氏の時代と二神氏」記念講演記録より）

「二神氏は粟井郷内の所領を相伝し粟井郷反役職、河野郷役職に補任され、河野氏家臣団の中で重きをなすようになった。そして風早郡の宅並城に拠って宅並二神衆を形成し、河野氏の軍事力（水軍）の一翼をになった」（『愛媛県史、古代・中世』昭和59年愛媛県発行、石野弥栄氏執筆P556）と、このように述べています。

「宅並二神衆」は二神氏の系譜の中でも特に軍事をはじめ、平時にあっては二神島で習得した漁業や農業、林業、土木など一族が生き抜くための総合的な知識、技術を持っていた軍事的知識集団であったことが想像されます。

このような「宅並二神衆」が越智郡の鴨部郷に支配権を得ることはどのような意味があったのでしょうか。「時代の経過するに従い、河野氏の統制力はますます衰え、来島を本拠地とした村上氏が不穏な態度をとるようになった。村上通康の子の牛松（後に通総という）は越智郡日吉郷海会寺領を横領した」（『二神文書』景浦勉著、伊予史料集成刊行会、昭和52年1月8日発行）

これは、来島村上氏が河野氏に反旗を翻した決定的な事件（元亀元年・1570）ですが、それ以前から来島村上氏が河野氏に対してとっていた不穏な態度にはいくつかの前触れがあったらうと考えられます。

ちなみに、後に来島通総が横領した（景浦勉氏）と云われる梅仙軒靈超の知行する日吉郷海会寺領はこの事件までに室町幕府將軍足利義輝の頃（天文15年1546～永禄8年1565）から公用錢の未納が続き、たびたび幕府は通宣（左京太夫）にその督促を依頼した紛争中の領地でした。来島村上氏の本拠地来島城と目と鼻の先にあり、現在の今治市蒼社川から北の近見山までの平地部と推定されます。

そこで河野通宣は、

事件を遡る18年前の天文21年11月に日吉郷海会寺領を初めとして来島村上氏に対する監視、圧力と牽制を行うための軍事的理由から「宅並二神衆」に対して鴨部郷新田を安堵したのではないかと考えられます。従って安堵した土地からは別に米や作物が多く収穫出来なくても良かったわけで、現地の鴨部郷の土地の状況から見ても十分にそれが理解できます。なお、当時は宅並二神衆が拠点とした小川村から鴨部郷行くためには来島海峡を越えて船で直接蒼社川を遡ってゆくコースが採られていたのではないかと考えられます。当時の蒼社川は水量も多く、鴨部郷の入り口付近で蒼社川の勾配を調整するための段差が確認されることからそのような推測が成り立ち、又、宅並二神衆がこのコースを採ることが河野氏にとって来島通総への牽制、圧力となったことは容易に想像されることです。

しかし歴史の事実は元亀元年、予想された村上通康の子の牛松（来島康総）による越智郡日吉郷海会寺領の横領事件へと発展してゆくこととなります。この時代河野氏の実力は益々衰退を続け、二神氏の中にも修理進（豊前守）のように来島氏側で統一行動をとる系譜の存在が現れ、いくつかの系譜の流れへと発展して行くこととなります。

【参考文献】

- * 『河野家文書』（景浦勉著・伊予史料集成刊行会）
- * 『二神家文書』（景浦勉著・伊予史料集成刊行会）
- * 『河野氏の歴史と道後湯築城』（川岡勉著・青葉図書）
- * 『河野氏ゆかりの地をゆく』（風早歴史文化研究会）
- * 「河野氏の時代と二神氏」
（石野弥栄著・二神系譜研究会記念講演記録）

系譜家紋紹介

No. 2

常任理事 二神 信助

余戸（ようご）二神氏

余戸二神氏は現在、松山市の中心部から南西方面へ6キロ程、伊予鉄郡中線余戸駅を南へ300メートルばかり行った地域を中心に発展してきた系譜で、同家に伝わる古文書には「本家風早郡二神丑之助ヨリ別家シテ同郡柳原ニ住ス。其後伊予郡余戸村庄屋役被仰付以後代々役名記之左之通」と書かれている。同家「豊田藤原氏子孫系図・次第」には藤原氏を祖とし、後に豊田姓を名乗り二神氏となってゆくくぐりがかかれていますが、これは本島二神氏の所持する「豊田二神嫡流系図写」と一字一句違いのない全く同じ表現で系図に現れる人物も二神通範までは一人の違いもありません。この事実はどちらかの系図が下敷きとして作成されたことを意味します。

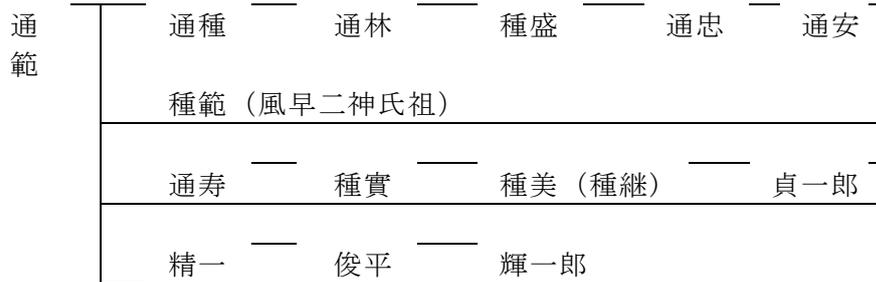
本島二神氏の「豊田二神嫡流系図写」は安永年間（1772～1781年）に二神種章（1734～1794）が整理作成したもの（創刊号P49～51参照）であることが判明していますので、余戸二神氏の「豊田藤原氏子孫系図・次第」の作成者であろうと推定される二神通安（1699～1753）が先に、種章が系図作成の下敷きに使用したのと同じものを使って作成したものと考えられます。

それでは中世と近世の時代の人物、二神通範以後の余戸二神氏の系図に現れる人物はどのようになっているのでしょうか。



余戸二神氏系図

【余戸二神氏略系図】



この略系図でもお判りのように余戸二神氏は通範の嫡子通種の系譜から分家した通林の第二子種盛の嫡子通忠（1661～1757）を初代としています。

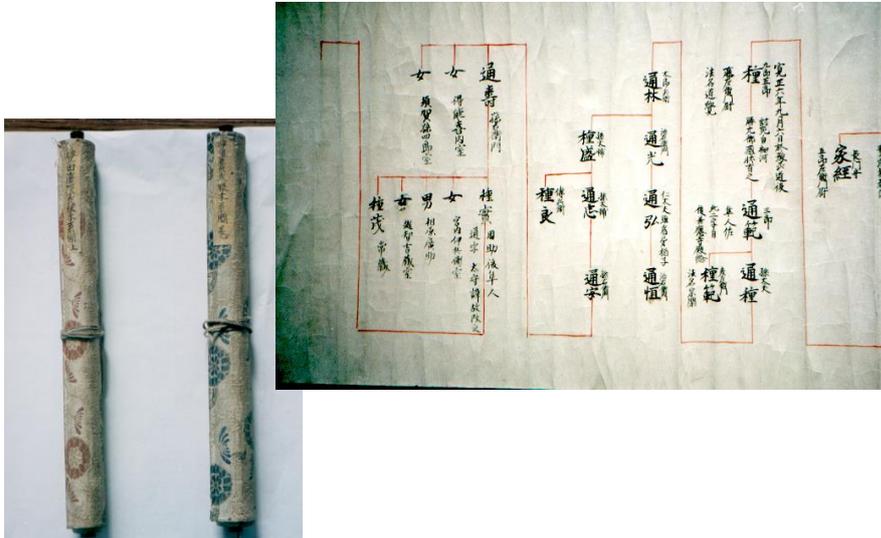
ご承知のとおり、通種は弟種範（風早二神氏祖）とともに来島通総の配下で慶長の役（1597）に出陣しています。本島二神氏は通種の後を継いだ家種が松山藩主加藤嘉明の会津転封に伴い二神島に帰島します。その後二神島で没し、墓石は昨年二神島で発見（会報第2号P9参照）されています。

従って、余戸二神氏は本島系譜の分かれであるとも云えます。が、同家文書「本家風早郡二神丑之助ヨリ別家シテ同郡柳原ニ住ス・・・」とあるように、通種は一時柳原に住んでいたと云うことで、それが慶長の役の前なのか後なのか分かりません。河野氏滅亡後の経過からすれば十分に考えられることです。

ところで問題は「二神家」と書かれた余戸二神氏の別の系図略記冒頭に「・・・藤原ノ次子豊田氏トナリ三子二神氏トナレリ伊勢ノ國桑名ニ住メルモ加藤嘉明ニ従ヒ伊豫國ニ移ル風早ニテ庄屋トナル・・・（後略）」（昭和40年同系譜、二神哲五郎調）との文書が残されていることです。この文書の下敷きになったものが何であるのかその記載は残されていませんが、豊田氏の末裔である余戸二神氏が、いつの時代にどんな理由で伊勢國桑名に住んでいたのかが判りません。そして二神島との関連の記述に全く触れられていないのがこの文書の特徴となっています。

先に紹介した文政の頃書かれたであろうと見られる同家文書には

「伊勢ノ國云々・・・」の記述がないことから「二神家」の系図略記冒頭文の検証は出典を含め別の観点からの調査が必要ではないかと思われます。ただ、通種、家種ともに松山藩士として一時加藤嘉明に仕えており（「片山二神文書」）文禄4年（1595）加藤嘉明が伊予国松前城主として入国する以前に通種が何処にいたのかを調査することがこの記述の証明にもなるものと考えます。



つぎに、余戸二神氏で庄屋職に就いた経緯のことについて触れておかななくてはならないことです。

同系譜の古文書では初代通忠が余戸村庄屋職を仰せ付かったのが元禄4年（1691）となっています。その経緯についてこの文書では

詳しくは触れていません。が風早郡別府村（現在の北条市別府）の渡部家に伝わる系図略記に次のような記述があります。

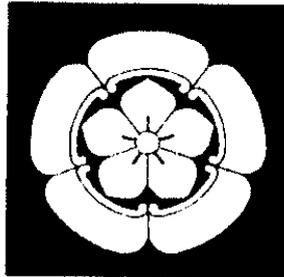
「彌右衛門・次男、父太左衛門共居住干垣生村而余戸村里正役蒙、居住干彼地在役中病死跡里正役二神家江讓・法諱、説岩禪立禪定門、元禄七年九月十三日没」

つまり、「余戸村の庄屋（里正）は元々渡部家の彌右衛門が役を勤めていたが病気のためにその任務が勤められなくなりその跡役を二神家へ譲った。彌右衛門は元禄7年9月13日に亡くなりました」と云う意味です。このことによって余戸二神氏がこの時期に風早郡別府村の渡部家から庄屋職を受け継いだことが判り、渡部彌右衛門が病死する3年前の元禄4年（1691）であれば納得出来ます。余戸二神氏はその後、通忠の時代に伊予郡靄吉村の入庄屋、享保年間に余戸村大庄屋となってゆきました。

ちなみに、元禄時代から幕末にかけて余戸二神氏の菩提寺は善応寺で、同家関係の過去帳は現在も善応寺に祀られています。現在の同家菩提寺である臨濟宗正宗寺には何かの理由で明治以降に移ったものであろうと思われます。

また、さきに紹介した余戸村の庄屋職を二神氏に譲った風早郡別府村の渡部彌右衛門（戒名・説岩禪立禪定門、元禄七年九月十三日没）の過去帳は現在も余戸二神氏の一族と共に善応寺に眠っていることを付け加えておきます。

余戸二神氏家紋



余戸二神氏の家紋は「五瓜に桔梗」と云われる紋様で、地が白い

ことから「地抜き・五瓜に桔梗」とも呼ばれます。瓜が文様として用いられるようになったのは鎌倉時代からとされています。『北野天満宮縁起』や『春日権現記』などの衣服にこの文様が見られます。

会員さんの便り

73歳、東大の赤門を潜る

今治市 豊島 信一



二神英臣さんに奨められて車内に入る。春立つとは言うものの、無意識のうちに何度もコートの襟を高く掻き合わせている宵であった。

車外で見送ってくれている英臣さんと奥様に礼を言って、退きと

って戴くよう話をしているとき、豊田さんが帰ってこられた。つい10分ほど前に「夕食を摂る暇がなかったので、うどんでも食べてくる。」と、危ぶむ声を振り切るように行かれたばかりである。私の歳になると、俗に言う「横着」現象が始まるのかあまり物事に拘ったり杞憂することに疎くなる。それでも豊田さんの機敏な行動を拝見して、「あっ、旅なれておられる。」と、無性に心強くなったものである。

豊田さんと二神さんが何か打ち合わせをしている間に、指定席番をもう一度確認してみる。2月19日19時・JR松山駅前発で、座席に間違いなし。帽子を取ってフックへ掛ける。

バスが松山ICから高速道に乗ったところから気分が変になってきた。自分がハンドルを握っていて酔った経験は全くない。にもかかわらず、運転を代わったり、バスなどに乗せてもらおうと酔ってしまう。どうも私の場合は三半規管の問題ではなくて、精神的なものであろうと思う。睡眠不足を口実に、豊田さんに挨拶をしてシートを倒した。

気分を紛らそうと目を閉じる。わざわざ、北条から見送りにきてくださった英臣さんご夫妻に、改めて感謝の思いを巡らす。白晳の内に秘めた熱血。沈着かつ鋭い洞察力。30年の時空が彼の人柄に更なる魅力を

加味されたことはうれしい限りである。勿論、その間、年賀状の交換は続いていたわけであるが、近年、鉄道 OB が主宰する文芸誌に拘るようになって、再び交流が繁くなり、彼が今治駅へ勤務するに及んでその頻度は更に高まった。

そんな中で、「二神系譜研究」という地方史の 1 ページを差し替えかねない壮大な研究の存在を知り、また、初めて「神奈川大学日本常民文化研究所」とか「東京大学史料編纂所」などという「いかめしい」研究機関の存在を教えてくれたのも彼だった。

たまたま、「役員さんが東大史料編纂所・常民研のほうへ研究に行かれるが、またとない機会だから同行してみては。」との奨めに甘えてやってきたものの、ハテどうなることやら。そんなことを思い巡らしているうちに、いつとはなしに眠りに入っていた。

「ただいまから消灯いたします。なお、読書をされる方は読書灯をご利用ください。」というような意味のアナウンスで目がさめる。3 時間ほども眠っていたようだ。おかげで気分はよくなっていたが、すでに窓のカーテンも閉じられて、バスの中は真っ暗。本でも読んでいるのか、仄かなオレンジ色の明かりが二つ三つ、網棚とおぼしい高さに灯っているだけである。カーテンの隙間に指を入れて覗いてみても、チラッ、チラッと一瞬の光が流れるだけ。

ふと先日、テレビで見た「エコノミー症候群」という言葉が頭をかすった。やおら立ち上がって手探りしながら階段を下りてトイレに行く。再び二階の席へ戻ろうとしたとき、降りるときには気が付かなかった階段の横に、セルフサービスのパック入り緑茶・紅茶・コーヒーが置かれてあるのを発見した。宵の口にたっぷり眠った罰で、眠れないままに運動を兼ねて何度も往復し、あれこれと、何杯ご馳走に預かったことだろう。私のような客がいては JR バスもたまったものではなかろう。

カーテンの隙間から忍び込む闇の色合いが少し和らいできたのかなと思うころ、いつしか再び微睡みに揺蕩う。

どのくらい経ったのか、アナウンスに起こされて窓外を見るとすっかり明るくなっていて、まもなく「東京駅八重州南口」の駅名標示板の前にピタリと止まる。前のほうの席に居られた豊田さんはすでに衣服を整えられていて、いつでも下車オーケーの態勢で泰然としておられる。慌てて支度をして、何人かの後に続いてステップへ出る。外気の冷たさが

反って気持ちがいい。急に元気が出た感じで颯爽と地上へ降り立つ(つもりであったが、膝の力が抜けて、たたらを踏んでしまい、厳しい現実にニガ笑いだ)。

八重州口地下に降りてみたが、午前7時半過ぎた時刻とあって、開いている店も疎らで、ほとんど選択なしに豊田さんと軽い朝食を済ませて時間稼ぎ。営団地下鉄「丸の内線」に乗り本郷三丁目で下車。徒歩4～5分で「赤門」を仰ぐことができた。

一般に東大の赤門と言われているが、重要文化財で「旧加賀藩屋敷御守殿門」という立派な名称があることを知る。豪胆かつ華麗な建物の下に立つと、各人各様の思いがあるようで豊田さんも頻りに頷いてられた。

我々のニキビ華やかなりし頃は、私のように剣道でもやろうかという種類の人間には「海兵」「陸士」という軍人養成の学校が。哲学的雰囲気の魅力を感じた人にとっては、「東京帝国大学」が至上の憧れであったように思う。幸か不幸か私の脳容量ではその「海兵」にすら門前払いを喰ってしまったものだが・・・。

今こそと眉を上げカバンを抱えなおして赤門をくぐる。少しの戸惑いとおおいなる感激を持って。尤も、これは事前に事務局が手配してくれていたお陰でもある。赤門に入って左に折れると、すぐ「歴史史料編纂室」がある。多少くすんでいるが研究の場にふさわしく、厳として然も奥ゆかしさを感じる建物である。

受付に事務局手配の「閲覧承諾書」を提示して来意を告げる。程なく若い女性が出てこられた。楚々とした美しい方である。抱えているファイルが板についていて、将に格好がいい。一瞬、あれっどこかで・・・と、ポンコツコンピューターが慌しく検索に走る。「遠い昔」が検索されて、「恋」という字に恋したころ、と出た。登校途次で出会うようになったメッチェンに、キーポイントがあったようである。

出てこられた女性は高橋敏子さんと言われ、この後いろいろと親切にしてください、かつまた、大変ご面倒をおかけしたのである。彼女は、東大史料編纂所の古文書室に所属され、主として荘園史や京都の東寺関係文書の解析を専門としておられるそうで、豊かな知識の片鱗が対話の中に伺え、とても爽やかな馥郁と匂うような方であった。

多分、特別なご配慮であったと思われるが、小会議室を手配くださり史料閲覧証票の作成、提出、バッジ、ロッカーの取り扱い方から、目録

検索、史料の請求、閲覧・複写、返却と。また、多量の古文書史料を抽出していただくなど、筆舌に尽くしがたい便宜を図ってくださり、心置きなく閲覧と研究に没頭することができた。

何度かとった休憩の際、館内を歩いてみた。一般の図書館には感じられない独特の雰囲気がある。書架に整然と、各県別に(例えば、熊本県の欄に、阿蘇文書、柚留木文書など)収められた膨大な古文書や史料に眩き、先人の息吹きさえ感じられて、畏敬と戦きを禁じ得なかった。

昼は、構内の大食堂(安保闘争の時代に見覚えのある安田講堂に違いない)の地下にある学生食堂へ降りてみた。結構、割安で品数も適当に揃っていてニーズを満たしているようだ。ただ、広いだけに照度不足の感は否めず、またインテリアの面に至っては全く配慮の痕跡すらないように見えた。尤も、構造的に制約された間取りと採算度外視の方針に基づくものがあるろう。地下を出たすぐ傍らのショップにも入ってみる。なかなか豊富な品揃えで、学生対象の文具は勿論、電気、カメラ、通信機器のほか、日用雑貨すべてが揃っているようだ。客も、一般人と見まごう姿も多く見られて結構な繁盛ぶりであった。孫への土産にキーホルダーを求めて、史料室のほうへ帰る。

私は、「二神文書 306」に見られる、「鴨部郷新田分為代所新田弥九郎知行分之事」について、どう読み取るのがよいのか浅学故の疑問を持っていた。一応、景浦先生が「伊予史料集成第5巻」において、明快な解説・訳を示しておられるのであるが、幼い頃より、「鴨部村小鴨部」の名称は耳にしていたが、「新田・しんでん」の呼称はついぞ聞いた覚えがなくて、かつて、事務局長と巡検に訪れた後も、再三現地に赴いて複数の古老などにも尋ねてみたが、期待するものは得られていない。

今回、何か関連する新しい発見は無いかと密かに期待したものであったが、残念ながら再調査に委ねざるを得ない結果に終わった。翌日が差し替え困難な予定で塞がっていて、僅か8時間足らずの調査作業で帰途に着かざるを得なかった私自身の杜撰な計画を悔やむことしきりである。

高橋さんに心からの謝辞を述べ、不忍池畔に宿をとっていた豊田理事とは赤門前でお詫びして別れた。もう一度赤門を振り返り、ネオンの走り始めた本郷通りの雑踏を泳ぐように駅へ向かった。

会員さんの便り

二神島雑感

西東京市 二神泰次郎



ロサンゼルスに「ミラマ」と言う日本の「フジタ」が所有しているホテルがあった。その支配人をしていたのが慶応大学出身の忽那さんという青年であった。聞けば彼も四国の忽那島に関わる人であった。バブル期に、東京の「フジタ」がボブホープから買い取ったものであるらしい。彼の父親がフジタの役員をしておられた。

あるとき、忽那七島の話をして何かご先祖の史料などないものかと尋ねたのだが、その方は史料などに興味がないらしく、

言下に「忽那とか二神とか言うのは、その昔は河原乞食だったのだ」と、昔の調査など迷惑千万な話とにべもなく断られた。

そのとき感じたのだが、二神氏も近世の史料が乏しいのは、この時代の先祖はあまり恵まれていなかったもので、家の歴史を語りたがらなかったのだと思う。

戦後、まだ紙の不足していた時代、珍しく旅行雑誌を神田（の書店街）で見かけた。その冊子に「忽那七島、とくに二神島」という見出しの記事があった。和歌森太郎さんの文章でちょっと面白い記事であった。二神島やその周辺では今も一時代前の風習が残っていると書かれていた。忽那修徳さんが生きておられればきっといい仕事をされたであろうと残念でならない。（忽那修徳さん、地域雑誌「ジ・アース」を年6回発行していた。二神島シンポジウムの仕掛け人だった。）

私が、松山中学二年生の頃、偶然松山市立図書館で「二神氏系図の研究」という小冊子を見つけた。その後松山は空襲で焼けてしまったのでどうなったのか判らなかつた。五十年あまりも経ってやっとそれが松山のコミュニティーセンター内の市立図書館にあるのをつきとめた。それは、「大山祇神社関係資料」として登録されていた。こうして私は「二神」について次第に興味を持つようになり、瀬戸内海の水軍についての図書を買集めるようになった。

けれどもそれはとても少なくて難しいことが判った。現在の皇太子殿下が英国に留学されたとき、テムズ川の運航の歴史を研究され、卒論に瀬戸内海の海上交通についてまとめられたということを知った。誰か殿下にインターネットで伺ったら案外と文献を沢山御所有かもしれない。殿下のそのものも興味深い。（但し、英文かもしれない。）

先ごろ、「カリブ海クルージング」に出かけたが、カリブ海の島影は紺碧の海も美しく、船隠しに適した入り江など、瀬戸内海の昔の島々を偲ばせる。海賊の根拠地となったのもむべなるかなと感じ入った次第である。

私は、「海の民ふたがみ」に送るような情報を何も持っていないが、郷土史としてまた水軍史として楽しく読ませていただいている。

石造物が語る海民ロマン ～一石五輪塔から見た二神島～



しまなみ水軍浪漫のみち
文化財調査員
大成 経凡 氏
(おおなる つねひろ)

● しまなみ調査団、忽那諸島へ上陸！

平成12年度より始まった「しまなみ水軍浪漫のみち文化財調査」も、調査事業の半分を経過し、それぞれの部門ごとに大きな成果があがっているようです(2カ年事業。調査事務局は、愛媛県教育委員会文化財保護課)。

そうした中、私が所属する石造物部門では、しまなみ16市町村の石造物を客観的に見るデータとして、平成12年12月末から1月上旬にかけて、中島町内の石造物を調査しました(のべ8日間)。特に対象となるのは、村上水軍や忽那水軍が活躍した中世の石造物で、五輪塔や宝篋印塔、宝塔や一石五輪塔がそれに含まれます。

一見マイナーと思われる石塔の調査ですが、その形態や材質によって、大まかな時代の判定が可能です。文献調査では追えない中世の光景が、物を言わぬ路地裏の石塔や墓地にひしめく石塔群を観察することで、しだいに見え始めてきます。例えば、豊田氏がいつ二神島へやってきたのか、その実態はいまだもって謎とされますが、発掘調査から得られたデータや石塔の大まかな年代判定を行えば、ある程度見えてくる部分もあるかと思えます。

とは言うものの、私自身は決して石造物の専門家ではなく、この度の文化財調査を通して、徐々に力をつけているところです(石のキャリアは、まだ1年)。特に私が担当しているエリアは、今治市や越智郡の陸地部で、旧郡名で言えば越智郡と野間郡がその対象地域となります(野間郡の範囲は、現在の今治市乃万・波止浜、波方町、大西町、菊間町を指す)。しかし、限られた範囲を調査するだけでは、多様性や希少価値は見えず、冬場を迎え、忽那諸島へ乗り込むまでは、自身の調査意欲そのものにも“お寒いもの”がありました。

● さすが、忽那諸島！びっくりこいた…。

忽那諸島の中世と言えば、私はまず、南北朝期に活躍した“忽那水軍”を思い浮かべます。そして戦国期に入れば、能島村上氏の勢力も伸長してきます。また、風早郡の陸地部においては、来島村上氏が影響力をもち始め、これと連動する二神氏の活動は、既にご承知の通りです。では、それらの文献上の動きと、石造物との関連はいかがなものでしょうか。

私自身、調査目的で中島入りするのは今回が初めてで、当初は2泊3日の時間を費やせば、ある程度見えてくるだろうとの安易な気持ちがありました。しかし、大きく見誤っていたのは、石塔の材質と、その数の多さと多様性です。しまなみ地域では、どちらかと言えば、花崗岩製の石塔が多いの対し、中島では凝灰岩製(灰質)や安山岩製のものが多く、そこからすぐに村上水軍との関係は導きだせそうにありませんでした。また、本島以外の有人島にも、豊富な石塔類が存在し、それらの多くが“中世から近世初頭のもの”であることを念頭に入れば、一体これらの島々は何なんだと、底知れないパワーを感じました。

ちょうど調査へ入った時期、怒和島では町教育委員会が宮浦地区の発掘調査を行っており、現在は人の住んでいない宮浦地区に、塚のごとく盛られた石塔の残欠群があり、地中からは中世遺物が豊富に掘り出されていました。まさに“兵どもが夢のあと”とはこのことと、現地に仁王立ちした私は、そこがかつては国境であり、海の街道に面した場所であると、改めて認識したしだいです。

そんなわけで、2泊3日以降も追加調査を実施し、有人島については全て上陸を果たし、二神島へは2度訪問したしだいです(島内を歩いていると、神奈川大学の関係者と間違われた…)。

● 二神島“石塔ウォッチング”

二神島の調査初日は、理事の二神重則氏・豊田渉氏にも随行して頂き、島内集落を徹底的に見て回ることにしました。どうしても二神島というと、本浦にある二神家墓地の印象が強く、「二神島＝二神氏」との認識に至っていました。しかし、「本浦以外の集落内にも、きっと石塔はあるはずだ！」というヒネクレ根性が幸いしてか(?)、本浦以外でも何カ所もの石塔を見つけ、ますます中世二神島の実態が分からなくなったしだいです。というのも、本浦の二神家墓地を含め、島内には少なくとも17カ所の石塔をまつた箇所があり、その多くが中世から近世初頭を指し示す遺品だったからです。

石塔の種類でいうと、五輪塔・宝篋印塔・宝塔・一石五輪塔の4種類が確認され、その多くは残欠の状態で、1ヶ所に数種類もの石塔が見られる場所もありました(五輪塔の場合、空風輪・火輪・水輪・地輪の4パーツがそろって完形品となる)。材質では、凝灰岩製の石塔がよく目につき、それは“今治平野の花崗岩製”とは対照的です。おそらくこれには、

石塔の採取地や入手経路の違いが関係してくるものと思われませんが、中島町全体を見たとき、とにかく五輪塔の材質では、凝灰岩製の占める割合が多いのには驚かされました。そして今治平野やしまなみ島嶼部ではあまり見られない事例として、安山岩製で小型の五輪塔や、凝灰岩製の宝篋が調査をしていて目につきました。

また宝篋印塔では、「小型で、基礎と塔身が一体化した」安山岩製のものが数多くあるようです(写真1)。このタイプは、しまなみ島嶼部や今治平野ではさほど見受けられず、旧野間郡の大西町から風早郡の北条市へ向かうにつれて、遺品の数が増えていきます。愛媛県内では、このタイプで在銘品の事例が、美川村・久万町・砥部町・保内町・菊間町などで知られ、それらを古いものから年代順に並べていくと、享禄3(1530)、天文3(1534)、永禄10(1567)、文禄3(1594)、慶長?(1596~1614)、元和5(1619)…と、その大まかな造立時期が想定されます(ただし、銘があるのは稀なケース)。中島町内だけでも、この種の宝篋印塔が少なくとも42基は確認され、島々の内訳は以下の通りです。本島17基・怒和島8基・睦月島7基・二神島4基・津和地島4基・野忽那島2基。これらは合体式のため、残欠の状態での確認となりますが、それらを眺めていると、戦国から近世初頭に生きた“海民たちの思い”が伝わってくるようです(本島は、大浦・小浜・長師・吉木・饒・畑里・熊田・粟井のみの調査データです)。

そして新たな発見としては、本浦の個人屋敷地裏の畑から、多数の石塔残欠群が見つかったことです。位置的には、二神家墓地からそう遠くない距離ですが、畑の石積に転用されていることもあって、すぐには気づかない状態でした(西岡さん宅の裏)。その中には、大雑把に見ても、凝灰岩製の五輪塔10基近くのパーツが確認され、本浦の小集落だけで(二神家墓地も含め)このように多数の石塔が見つかるとは、正直言って驚きました。石塔が、必ずしも墓地だけに存在せず、集落内路地の突き当たりや庭の片隅に存在することを、改めて実感したしだいです(土地の神様“地主さん”としてまつられる)。それだけに、“どうしてこんなにもの数の石塔が“二神島”に存在するのか?”改めて、中世・海民たちの活動に思いを馳せるしだいです。

● 一石五輪塔の“材質”に注目！

一石五輪塔とは、複数パーツから成る五輪塔を“一つの石”で表したもので、生産性を考えれば、合体式の五輪塔よりも少ないコストと時間で造立が可能です(小さく、移動も簡単)。そのため、室町時代以降に爆発的に造られ(特に西日本に多い)、江戸時代に下火となるものの、下級武士や名主・百姓層の墓碑的な供養塔として建てられます。たまたま私は、石造物部門の中でも、さらにマイナーな一石五輪塔に興味があり、とりあえず、今治平野から北条平野にかけての地域と、忽那諸島については、1年をかけ、その特徴を何とかおさえることができました(江戸中

期以降の在銘品は、データから削除)。

表1を見れば分かるように、二神島では27基の一石五輪塔を確認しました。材質で見ると、そのほとんどが安山岩で、その傾向は忽那諸島全体を通してとも言えることです。そしてこれを今治平野から北条市にかけての市町村ベースで見た場合(表2と表3)、今治市では全体の90%が花崗岩で、北条市は全体の80%近くが安山岩。海岸や山間を通し、北条と接する菊間町や玉川町は、その割合が微妙な数値を示しています。これが、しまなみ島嶼部地域へ行けば、花崗岩が90%以上の数値を示すことはだいたい想像ができます。今日でも有名な大島石ですが、しまなみ地域には花崗岩製の遺品が数多く分布し、一石五輪塔のデータがそれを如実に物語っています(広島県三原市も、花崗岩製の遺品が多いことで知られています。参考文献『三原市の石造物』/伯方島には、珍しい事例として、石灰岩製の一石五輪塔も存在しています。現在、8基ほどを確認)。

そしてこれが北条市の場合、恵良山・腰折山・名石山・雄甲山・雌甲山・高縄山・鹿島に代表されるように、安山岩を生み出す火山系の山々が多く、一石五輪塔をはじめ近世の墓標には、地元で採れる安山岩が数多く用いられています(善応寺山門の石段や、柳原にある高浜虚子の句碑も安山岩製です)。二神家墓地にある家型の石祠も、実は安山岩製で、これと同様のものは、津和地島にも1基存在しています(石材産地は豊後?それとも風早?/周防大島の東和町にも何基か事例があるようです)。ただし、同じ石祠でも、本島や睦月島にあるものは“豊島石”でできており、豊島石製のものは今治平野や北条平野でもよく見かけます(豊島とは、産業廃棄物で有名になった香川県の島)。

● 一石五輪塔の“形態”に注目!

厄介なのは、花崗岩製の一石五輪塔であれば、ほぼ同じ形態を示すのに対し、安山岩製は、造られた工房(製作者)の関係か、形態が多岐にわたるようです。例えば、二神家墓地にある一石五輪塔でも、安山岩製のものは2形態に分かれ、「いわゆる標準スタイルの、空風・火・水・地のバランスがとれたもの(Aタイプ)」と「簡略化が進んで空風輪と火輪との幅が等しく、空輪が四角錐に近い状態で、火輪の軒反りを線刻で表したもの(Bタイプ)」とがあります(写真2)。前者と同型のものとしては、怒和島の野間家墓地が分かりやすい例だと思います(写真3)。そして後者の形態は、北条平野に多く見られるタイプです。中島町では、本島の大浦や粟井で何基か確認を行いました。しかしこのタイプは、豊富な石塔データを有する“周防大島の東和町”にも類例がなく(参考文献『東和町誌/石造物編』)、管見の限りでは、北条平野を中心に、北は今治平野、南は松山市北部(堀江地区など)の範囲で分布する、風早郡を中心とした石塔スタイルだろうと思います(玉川町の法界寺と中村地区には、花崗岩製でBタイプのものが数基存在します。今治の工房で制作か)。

また、二神島小泊の「イボ神様」にある一石五輪塔のうち2基が、先

の2例とは違う形態を示しています。どちらかというところ「スマートで、空輪の先端が丸びを帯び、Bとは違って火輪の軒反りが線刻で示されない(Cタイプ)」ところに特徴があります(写真4)。おそらくこの形態のものは、二神系譜研究会の方なら、既にご覧になっている方もいるはずで、これと同様のものは、北条市磯河内の“二神信濃守の供養塔”と伝えられる場所に、3基ほどが確認できます(写真5)。また、北条市小川の共同墓地でも、このほど3基を確認しました。これらは、安山岩製の中でも、数的に少なく、ちょっと珍しいタイプです。

● 画像一石五輪塔って、何？

以上、二神島に見られる3タイプの安山岩製一石五輪塔を見て参りましたが、北条平野へ目を向ければ、これ以外にも何種類かの形態が存在します。その代表例としては、石塔の正面に合掌した剃髪僧を描く“画像一石五輪塔”があります。このタイプは、空輪がはっきりと四角錐の形状を示し、空風輪に表された二条線が、いわゆる“板碑”の形態を示しています。そして火輪部側面・背面の線刻は、軒反りを示すのか、それとも宝篋印塔の笠を表現したものか。もうここまできると、五輪塔のルールはそっちのけです。しかし、大きさそのものは、これまで紹介してきた一石五輪塔とほぼ同じです(40 cm~60 cm)。

この画像一石五輪塔は、一体どのような目的で造られたのでしょうか。一部歴史愛好家らによって、“かくれキリシタン”の石塔とする見方も存在しますが、それらの石塔そのものには一切“銘”がなく、憶測でもって断定へと結びつけるのは、いかがなものでしょう。仏教哲学や石造物の専門家からのご意見では、「五輪塔の中に合掌する人物が刻まれるのは、修行する人物(剃髪僧)が五輪塔と一体になる、あるいは修行する人物の体が“空風火水地”の5要素と同質になり、修行の完成を意味するというような、密教的教義を感じる」や「この石塔のどこに、キリシタン碑と決めつける証拠があるのか。形態で見た場合は、頭部は板碑の形状をしている」とありました。そして、画像にも何種類かのパターンがあり、その代表的なものとして、写真のA・B・Cをあげておきます。また、画像がないながらも、同じ形態をもつ石塔も数多く存在し、それらを併せた分布は、やはり北条平野を中心に、今治平野から堀江の辺りまで広がっています(写真6)。そこでこの場では、画像のあるなしを含め、この形態を示す石塔を、高縄半島地域にのみ分布する石塔として“高縄塔”と呼びたいと思います(先行の研究では、板碑化した一石五輪塔として“画像一石五輪塔”の呼称が使われてきました)。

● 高縄塔が造られた時代背景(来島氏との関係)

画像のある高縄塔は、この度の調査で、高縄半島周辺に少なくとも85基あることが分かりました(表4を参照/紛失した6基は数に含めない)。また、形態にこだわらなければ、画像の入った一石五輪塔は、これ以外

に 22 基が確認された)。

細かな分布領域と画像の種類別分布については、平成 14 年春発刊のしまなみ調査の報告書に譲るとして、この場では簡単な考察のみを述べたいと思います。

意外だったのは、分布している範囲が、文献に示される戦国大名来島氏の活動領域と一致している点です。堀江の港周辺にも、5 基の画像入り高縄塔が存在し、この港は戦国末期、来島通康の勢力下にあったことで知られています。そして、最も数の多い北条平野…。従来の考察では、旧河野氏領や松山藩領としての説明が見られましたが、「時代の混迷期に、風早郡に影響力をもった“豊臣大名・来島氏”の指摘はなされていません。こういう特徴ある石塔の事例は、高知県の中世小石仏の例にもあるように、戦国期から織豊期へと至る過程に造られたとする見方が一般的と思われます(参考資料:岡村庄造『高知県の中世小石仏と重弧蓮座紋』石塔・石仏部会誌/8号より)。また、建立する立場の人間としては、二神氏のような土豪クラスの階層から、一領具足的な、村で手作経営をしながら軍役に勤める(来島氏の)下級家臣などが想定されます。

天正 10(1582)年より激戦をきわめた、河野・毛利連合軍による来島氏攻めですが、これに屈しなかった来島氏の背景には、戦国大名としての強固な基盤と、高縄半島を海岸部のみならず“山間部まで”抑えていたことなどが考えられます。どうしても来島氏というと、海賊衆としてのイメージが付きまといますが、来島城や小湊城が敵の軍門に下り、鹿島城が敵に包囲された後も、音をあげない屈強さの背景には、山麓深くでどっしりと構える“山の来島衆”の存在が想定されます(小湊城は、今治海岸・北の玄関口を守る主要な城で、現在の湊町・城慶寺そばの丘陵部にあった)。もちろん、その論を証拠づける史料は、今のところ存在しませんが、北条市の立岩地区から玉川町の竜岡地区へ抜けるルートに、それなりの数“高縄塔”が分布している点を考えると、来島氏は高縄半島沿岸部の航路とともに、風早郡から越智郡へと抜ける“やまなみのルート”も掌握していた可能性が考えられます。途中にある神途(ジノト)・日高・幸門(サイト)・鷹ヶ森は、いずれも重要な山城として知られますが、鷹ヶ森城主の越智駿河守は、来島派の武将として『予陽河野家譜』にも描かれています。そしてこれらの山城の麓に、不思議なことに高縄塔は存在しているのです。

● 風早に残った来島衆

風早に残った来島衆の代表として、これまでよく二神氏が例として示されてきました。しかし、豊後森へはついていかず、風早に残った来島衆は他にもいて、中には大洲の進駐軍との間で、トラブルを起こす一党もいました。

風早の近世初頭を記す編纂本に『藤樹先生年譜』があります。藤樹先生とは、日本陽明学の祖といわれた中江藤樹のことで、藤樹は幼いとき、

祖父に連れられ風早の代官所にいました。祖父は、大津藩の飛び地・風早の代官職にあり、現地の支配にあたっていたのですが、元和6(1620)年にとんだトラブルに巻き込まれます。それは、クルシマ浪人・須ト(スボク)一党が、大挙して代官所を襲うというもので(襲撃そのものは失敗に終わる)、来島氏転封後の風早が、いかに“難地”であったか、進駐軍の苦勞ぶりが窺えます。ところで、そこで問題となっている“須ト”ですが、これはおそらく須保木氏(苞木の作道氏か)のことを指しているものと思われます。そして、やはり現在の苞木にも、高縄塔は存在しています。

また、旧家の保存で知られる伊予市灘町の宮内家ですが、最近報道された新聞記事では(平成13年5月23日の愛媛新聞)、灘町を開拓した初代・九右衛門の祖は、もとは風早郡の宮内に住んでいたとあります。そして、同家に伝わる関連系図によると、来島通昌との関係を示した部分があり(通昌とは、通康の嫡男・通総のこと)、そのことを知って思わず、宮内に残る画像入り高縄塔2基の姿を思い浮かべました。ひょっとすると「宮内家は、風早を出て、灘の開拓に活路を見いだした“来島衆”ではないか」と、私は勝手な想像を致しております。

そのほか、現在では廃墟となった集落「閨谷(うづたに)」や院内よりさらに奥の「オオモト」、高山よりさらに奥の「大河内」にも、画像入り高縄塔は存在し、主なき廃墟となった今も、誰かの帰りを待っているかのようです。

● 石の上にも1年。

“来島氏の説明で”かなり脱線(?)しましたが、二神氏が風早郡に地盤をもっていたことを考えると、あながち高縄塔の存在も無視できないものと思われます。ひと口に“安山岩製一石五輪塔”と言っても、形態が多岐にわたるため、それらの分布や数を細かく見ていけば、文献では追えない“過去の記憶”が蘇ってくるのかも知れません。最初は、二神島の一石五輪塔を見て、ひょっとすると「かくれキリシタンの石塔か？」と首をかしげていた私ではありますが、石の上にも1年座ってみれば、それ以外の可能性が色々と見えてきました。全ては、調査に対し“やる気”を起ささせてくれた、忽那諸島・石造物のお陰です。そんな石たちに、感謝したいと思います。

静寂した島の中、石塔の残欠を眺めていると、今にも海民たちの“ささやき”が聞こえてきそうです。



〈写真1〉
安山岩製・宝篋印塔の残欠。
右は相輪が欠損
(中島町大浦／長善寺)



〈写真2〉
二神家墓地の一石五輪塔
(右2つがAタイプ。左がBタイプ)



〈写真3〉
怒和島の野間家墓地



〈写真4〉
イボ神様の一石五輪塔
(右2つがCタイプ)



〈写真6〉 画像のない高縄塔。

〈写真5〉 磯河内の一石五輪塔
中央の2つ (菊間町河之内)

石質から見た一石五輪塔データ (表1)

	島名	花崗岩	安山岩	砂岩	合計
忽那諸島地域	野忽那	0	0	0	0
	陸月島	0	1	0	1
	本島	3	17	0	20
	怒和島	1	11	5	17
	二神島	4	23	0	27
津和地	1	11	5	17	
合計	9	63	10	82	

※本島については、主要箇所のみ調査

画像入り高縄塔
分布データ
(表4)

	市町名	個数
北条	松山	6
	粟井	5
	河野	25
	正岡	7
	北条	2
	難波	2
	立岩	9
	菊間	12
	玉川	7
	大西	3
	波方	2
	今治	5

石質から見た一石五輪塔データ（表2）

市町村名	花崗岩	安山岩	砂岩	礫質凝灰岩	緑泥片岩	合計
今治	134(90)	7(5)	4	2	2	149
朝倉	11	2	1	1	0	15
波方	28	2	0	0	0	30
大西	17	7	0	0	0	24
玉川	105(76)	32(23)	1	0	0	138
菊間	56(39)	82(55)	8(5)	2(1)	0	148
合計	351	132	14	5	2	498

()内の数字はパーセンテージ

石質から見た一石五輪塔データ（表3）

地区名	花崗岩	安山岩	砂岩	合計
北粟井	1	61	0	62
河野	14	106	3	123
条正岡	9	25	8	42
北条	2	5	1	8
市難波	2	20	0	22
浅海	1	0	3	4
内立岩	18	62	1	81
合計	47(14)	279(81)	16(5)	342

※市内の主要箇所を調査

()内の数字はパーセンテージ



写真A
(北条市宮内)

写真B
(北条市オオモト)

写真C
(北条市佐古)

大成経凡氏のご紹介

会報編集員

1973年に愛媛県越智郡波方町に生まれる。
今治西高から東北福祉大学にすすみ社会教育学科を専攻、
卒論のテーマは「地域文化を生かしたまちづくり」。
卒業後、今治市・越智郡の中学校社会科講師を勤める。
昨年度、「しまなみ水軍浪漫のみち文化財調査委員会」調査員を担当。

著書 「海の来嶋 山の久留嶋 童話の久留島」
「近世今治物語」 創風車出版

氏は地域史や水軍史に明るく、現在くるしま
氏関連の情報誌「クルシマ タイムズ」の発行を
通し、ゆかりある人々やグループとの連携を進
めている。



4月の総会に於いて熱っぽく語る大成氏

先の芸予地震およびその後の建物の建て替えや整理において、貴重な文化財や資料の紛失や損壊が心配されています。また、高齢者世帯の同居や古い建物の建て替え時に同様の心配があります。

今回、「芸予地震被災資料救出ネットワーク愛媛」の設立がありまた、同ネットワークより協力をお願いがありましたので掲載します。

歴史資料・文化財を保存するための
ボランティア活動への協力をお願い

芸予地震被災資料救出ネットワーク愛媛

芸予地震で被災された皆様に、謹んでお見舞い申し上げます。

古代以来の豊かな歴史をもつこの松山市域には、家々にさまざまな形で、家の記憶や地域の歴史を伝えるものが数多く残されています。しかし、今回の地震で損壊した家屋の修理や解体にともなう、長く伝えられてきた古い文書や記録などが無くなってしまうとすれば、それは家にとっても地域にとっても真に残念なことといわざるをえません。

そこでこのたび、伊予史談会など県内各地の歴史研究団体と、愛媛大学・松山大学・松山東雲女子大学などに所属する歴史研究者が共同して、芸予地震被災資料救出ネットワーク愛媛（略称：愛媛資料ネット）を結成し、松山市教育委員会の協力の下に、歴史資料・文化財を保存するためのボランティア活動をはじめることになりました。

昔の人々の暮らしぶりなど、歴史を知る手がかりとなる資料・文化財には、

古文書（江戸時代以前に、くずした文字で和紙に書いたものな

ど) 古い帳簿や本(和紙に書かれて冊子にしてあるものなど) 明治・大正・昭和の古い記録(手紙や日記・帳面など)・新聞・写真・絵 農具・工具、機織りや養蚕の道具、古い着物など、物づくりや生活のための道具などがあり、これらのものは、母屋や蔵にあるタンスや箱に収められたり、ふすまや 壁紙の下張りとして用いられたりするなどして残っています。

愛媛資料ネットは、これらの資料・文化財を、必要な場合には、皆さんからお預かりして安全な場所に保管し、一定の整理を施した上で、またみなさんにお返しする という活動を行なっています。

地域の歩みを伝える貴重な財産を守る活動に、なにとぞご理解をいただき、ご協力 下さるようお願いいたします。なお、ご所蔵の資料・文化財の保管・整理などに困っておられるような場合には、下記のところまでよろしくご連絡ください。

○松山市教育委員会文化財課

〒790-0003 松山市三番町6-6-1

TEL 089-948-6603 FAX 089-931-6248

○伊予史談会(事務局)

〒790-0063 松山市辻町12-36 斎藤方 TEL 089-925-8492

○芸予地震被災資料救出ネットワーク愛媛

(略称:愛媛資料ネット)

〒790-8577 松山市文京町3

愛媛大学法文学部寺内研究室気付

TEL&FAX 089-927-9317

Eメール terauchi@LL.ehime-u.ac.jp

八幡浜と二神権之介

常任理事 二神重則

”背伸びしてみる海峡の 今日も汽笛が遠ざかる・・・”

ご存じ森進一の「港町ブルース」です、今回はこの中に歌われている八幡浜を紹介します。

八幡浜は愛媛県の西部、美しいリアス式海岸の宇和海の入り江深くにあります。四国の西の玄関と呼ばれ、大きな魚市場をもっています。また有名なミカンの産地でもあります。



八幡浜港 正面中央左の小山が萩森城跡です。

「河野分限録」に宇都宮彦右衛門尉房綱 萩森城・高森城・城高・飯城、4ヶ所 舎弟吉之丞、法名喜清、子息金助。手勢83騎。この手勢の中に「二神権之介」の名があります。この権之介はいつの時代に八幡浜にいたのでしょうか。時計の針を600年ばかり戻し、八幡浜周辺の歴史を見てみます。

八幡浜は池大納言（平頼盛）の荘園でした。その後壇ノ浦の戦いで敗れた平氏の落人がこの地に逃れ、平家谷に住み着いたとの伝説が残っています。現在その地では「平家谷のそうめん流し」を夏の風物詩としてテレビで放映されます。

その後は摂津氏の領有となりました。

1330年、宇都宮氏は伊予の守護職となり大津地藏嶽（現大洲城）に城を築いた。

1337年、宇都宮宗泰は土居・忽那氏と根来城に戦い負けた。

戦国時代に、大洲の宇都宮清綱は房綱を連れて萩森城に隠居した。

1556年、摂津氏に対抗するため萩森城を改修した。

1568年、「鳥坂峠の戦い」

1572年、大友氏は卯之町の黒瀬城を攻め西園寺氏は降伏した。

1573年、本家の大洲地蔵嶽城は土佐の長宗我部氏に通じた大野直之によって奪われた。

1576年、萩森城も大野直之により落城し房綱は豊後に逃げた。

1577年、河野氏方島方衆の来島通康は土佐沿岸に反撃をした。

1579年、河野通直が大野直之を破る、房綱萩森城にはいる。

1585年、秀吉の四国侵攻、萩森城の歴史は幕を閉じる。

これらから二神権之介がこの地に生きた時代を推定するとすると、河野氏との関係からと分限録の人名からして、～1576年か1579～1585年と思われます。案外、豊後に逃げたと記録されている宇都宮房綱を、船に乗せて運んだのは権之介だったりするのかも……。また、手勢83騎の中に二神氏と関係の深いとされる、豊田氏（勘左衛門）の名前も見えます。

現在の萩森城跡には本丸・二の丸などの地籍名が残っています。萩森城跡から南の市街地を見下ろすと、新川が市を東西に分けています。戦国時代にこの川を境として、対岸の一角は宇和西園寺15将のひとり南方殿撰津氏の支配下にあり、梅の堂の南方、神山小学校前の小山が撰津氏の元城跡です。撰津氏は萩森城主宇都宮氏とたびたび戦ったが、その戦いと元城落城にまつわる伝説にちなむのが8月に行われる五反田の柱祭であると言われてしています。

その後の権之介や二神氏の足跡は見つかっていません。この八幡浜市やその周辺にお住まいの二神さん達には、是非権之介後の二神氏を調査してほしいと思っています。

参考資料

予章記・水里玄義 「河野分限録」

八幡浜市史 第2章 中世

中世における伊予の領主 著者須田武男氏

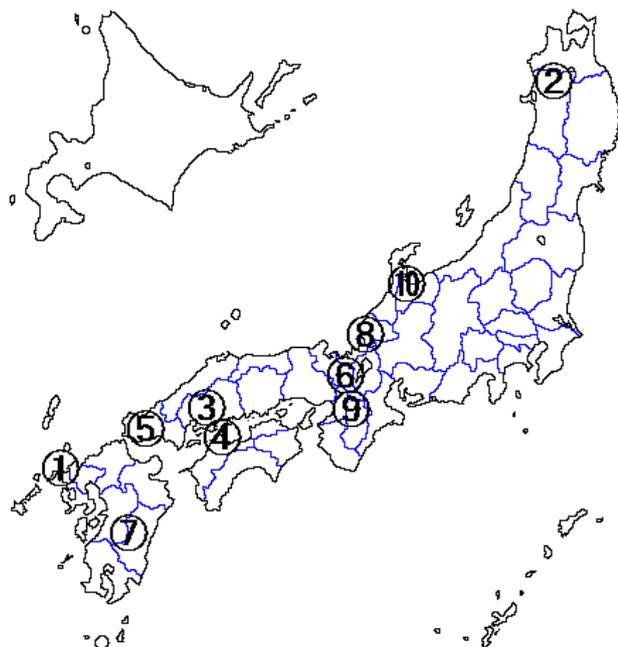
愛媛県の歴史



地名で「二神」と呼ばれている所

常任理事 二神重則

全国にはご存じの瀬戸内海の二神島以外にも二神と呼ばれている所がいくつかあります。今回はそこを紹介したいと思います。



- | | | |
|---|-------------|-----|
| ① | 長崎県大島村 | 二神島 |
| ② | 秋田県仙北郡西木村 | 二神山 |
| ③ | 広島県東広島市西条町 | 二神山 |
| ④ | 愛媛県北条市 | 二神山 |
| ⑤ | 山口県美祢市伊佐町 | 二神 |
| ⑥ | 京都市上京区出町 | 二神 |
| ⑦ | 宮崎県西臼杵郡五ヶ瀬町 | 二上山 |
| ⑧ | 福井県坂井郡丸岡町 | 丈競山 |
| ⑨ | 奈良県北葛城郡 | 二上山 |
| ⑩ | 富山県高岡市 | 二上山 |

二神島 長崎県大島村

二神島は、大島の属島で、大二神と小二神がある。

(島の歴史)

大島氏の祖は藤原師輔→顕光の弟、朝光の流れが大江氏を称し、やがて大島に土着して大島姓を名乗った。

豊臣秀吉は、朝鮮出兵に際し、二神島に於いて敵国降伏の祈願を命じ、これを行った。大島天降宮の市後(巫女)大島照子は「日の丸印」と宅地5畝7歩を受領したと言われている。また、出兵の折りの軍馬を放ち休ませたとの言い伝えがある。

「島の面積と内容」では、宅地70坪、山林2町1反7畝、原野9町3反1畝(小二神島、山林9反7畝、原野4反1畝)

昭和2年8月 大島村漁業組合が買収し、海草学の権威者である岡村博士の来島を得て、海草及びアワビの増殖事業に着手した。

昭和5年 初めて、海草の採取が行われた。

昭和12年6月 二神島共同宿泊所落成。8坪。

昭和37年 二神丸進水。組合運搬船。

昭和49年 第2二神丸進水。活鮮魚運搬船。

現在は無人島であるが、以前は人が住んでいた。戦時中は軍隊の駐屯があり、軍事施設の跡がある。大正7年に灯台が造られ、職員が住んでいたが、その後無人の灯台になった。



二神山 秋田県仙北郡西木村上檜木内



詳しい情報は
ありません。

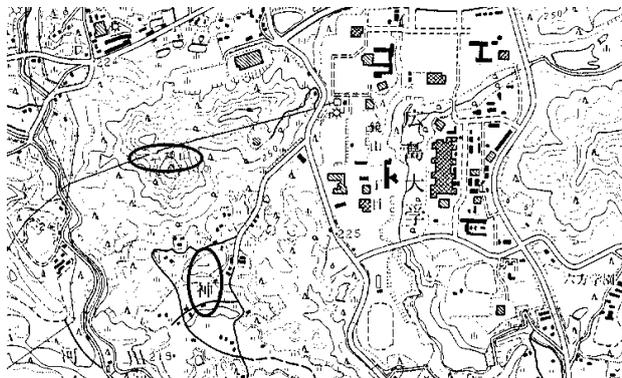
二神山（二神山城） 広島県東広島市西条町下見

建久2年(1191)宇治に敗死した源頼政の次男、又三郎と菖蒲の前は安芸の地に来て、又三郎は山県郡に知行せられ山県国政と称して、猿喰城を築城した。

後鳥羽天皇の建久3年(1192)源頼朝が征夷大將軍となり、菖蒲の前は頼朝より賀茂一円の地を賜り、その子新四郎は下見の地の二神山に城を築き、水戸新四郎頼興と名乗ってその守将となった。

建久6年(1195)8月4日、土肥遠平・三浦掃部介らの軍に囲まれ落城、城主の水戸頼興は夜陰に乗じて逃避した。

二神城の規模は、南北30間、東西8間。西城は20間四方、東城は14間四方。絵図の中には南側山麓に寺屋敷や荒神社有が見られる。



二神城（八竹山） 愛媛県北条市

愛媛県中世城跡調査報告によりますと、八竹山城（二神山城）北条市八反地にあり、二神氏居城（伝）と書かれています。また、文政8年の風早郡の地図には八反地に二神山と書かれているところが複数箇所見つけられました。



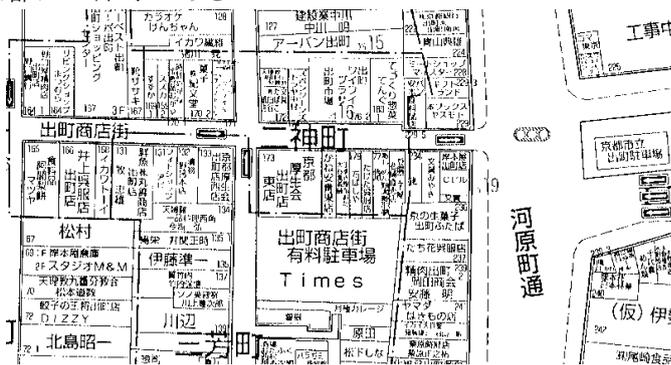
二神 山口県美祢市伊佐町二神

詳しい情報がありません。しかし、あの豊田氏の城があった殿敷から近い場所に二神という地名が見つかりました。豊田町の磯部さんより「二つの峰がある山が近くに有るから」との返事を頂きました。



二神町 京都市上京区出町

世界の京都に二神町がある！！



二上山 (二神山) 宮崎県西臼杵郡五ヶ瀬町

以下の情報は宮崎県西臼杵郡五ヶ瀬町にお住まいの秋本様より頂きました。神社の神楽に二神山の名前があります。

当地方の神楽には二神山がありますが、山の名称は二上山で、五ヶ瀬と高千穂の境にあります。二上山には三ヶ所神社の外宮があります。

三ヶ所神社(旧称 二神大名神)宮崎県西臼杵郡五ヶ瀬町三ヶ所宮の原

祭神 伊邪那岐神・伊邪那美神・猿田彦之命・菅原天神

創建 昌泰元年(898年)

由緒 上代は二上山の頂上に祀られていたが昌泰年間に二上山を中心にして東と西に下ろされ押方に東宮、三ヶ所に西宮を建立したものである。両社とも下宮がある。

明治2年、社名を三ヶ所神社と改称、同4年に郷社に列せられた。

丈競山 (二神山) 福井県坂井郡丸岡町

南丈競山1045m、北丈競山964m。南峰に白山三所権現の祠がある「二神山」とも呼ばれている。

丸岡町は最近「日本一短い母への手紙」で有名になった。



二上山 奈良県北葛城郡

峰が二つに分かれていて、男岳・女岳となっているので男女二つの神様で二神山とも呼ばれている。あの悲劇の皇子大津の墓がある。

大津の皇子の亡骸を二上山に移葬した折りに、姉の大伯皇女の歌が万葉集に残っています。(165)

うつそみの 人なる我や 明日よりは
二上山を 阿弟(いろせ)と我が見む

二上山 富山県高岡

東峰と西峰があり、その様なところから二神山と呼ばれているらしいが詳細不明。

先祖の地二神島は東南の方向から見ると二つの峰が特徴的である。九州方面から伊予灘を経て広島や京阪神に向かう昔の船人は、その島陰を見ながら、二つの神様と思ったのかもしれない。

有料道路で松山から大洲へ向かう途中にある、伊予市のインターチェンジから西を望むとよく見えます。特に夕焼けの海に浮かぶ島の有様は絶景です。



なお、山口県的美祢市の二神は是非調べてみたいところです。

役員をつぶやき ☆ ☆ ☆

「なぜ畑中へ住みついたのか？」

副会長 二神 俊一



時々、近所の庵にあるお墓へ行ってお墓掃除をしながら、私の先祖は「なぜ畑中へ住みついたのか？」という素朴な疑問がわいていた。

現在は松山市になっているが、以前は温泉郡小野村大字畑中とよばれていた。昔は文字どおり畑や田んぼの中だったのであろう。

小野川が近くを流れ、松山市駅から電車で15分くらい東へいったところである。

二神島から陸へあがり、道後平野の東方面へ15kmくらいの

所で昔は時間もかかったことであろう。

何か、手がかりはないものかと除籍謄本を調べてみた。

除籍謄本の本籍地 ① 愛媛縣久米郡畑中村拾六番戸 戸主 二神 佐十郎（佐十郎は天保8年＝1837年＝正月15日生まれ、豊四郎の長男）

② 愛媛縣温泉郡小野村大字畑中参百四拾八番地 戸主 二神 美德（美德は明治16年9月6日生まれ、佐十郎の長男）

竹之下庵の墓石は、古い順に、豊四郎、佐十郎、美德、萬次郎となっており豊四郎以前の墓石は現存していない。

また、二神の菩提寺はもともと畑中円隆寺（素鷲神社の隣）であったが、円隆寺が無住職となったため、鷹ノ子町の極楽寺となっている。

極楽寺の過去帳からの写しによれば、
佐右衛門（豊四郎の父）が嘉永7年3月10日＝1850年没
文佐衛門（佐右衛門の父）が享和3年8月8日＝1803年没とあり
更に、二神浩三さんの父、常一さんのノートからは、四良右衛門は元禄17年没（1704年）と記されている由。

これらから推測すれば、畑中に住み始めたのは 1600 年代あたりであろうか？ いや、もっと以前かもしれない。

いずれにしても、350 年から 400 年くらい前からこの辺りに居をかまえていたようである。それにしても、その頃から、どの様な職業に従事していたのであろうか

母、千代子の記憶では、鍛冶屋をやっていたらしいと知っているし、浩三さんの兄さんの泰次郎さんの話では、染め物に関係した商売をやっていたと聞いているし、あまりはっきりはしていない。どうも畑中で農業に従事してはいなかったようである。

ここで、昭和 35 年 5 月 1 日に発行された「小野村史」を紐解いてみる。小野村の古墳としては、播磨塚両梅本、今吉、平井谷あざ花之木のウシマ塚など古くから集落が確認されている。

江戸時代には松山藩の奨励で開墾が行われ、古市、平井谷、苧屋、畑中、南梅本、北梅本、水尻と人々が住み着いていったとある。明和 8 年(1771 年)の久米郡手鑑に久米郡庄屋一覧表があり、当時の久米郡は和泉、浅生田、古川、井門、居相、西石井、東石井、天山、土居、今在家、星岡、福音寺、北久米、南久米、高子、来住、日瀬里、水尻、畑中、苧屋、平井谷、小屋峠、北梅本、南梅本、西岡、志津川、樋口、山之内、北方、松瀬川、則乃内の 31ヶ村でかなり広範囲な地域にわたっていた。

また、萬延 2 年(1861 年)宗門大改による畑中円隆寺檀家の調べが久米村極楽寺に保存されていて、これによれば、庄屋藤次郎ほか 58 戸で、男 129 人、女 106 人、このほか円隆寺住職小僧尼各 1 人を合わせて 238 人となっており、一戸平均の家族は 4 人である。と記されている。

その後時代を経て、明治 14 年 4 月学区改正当時各校一覧表によれば、平井小学校が平井谷にあり区域の畑中村の戸数は 57 戸で、人口 277 名となっている。

明治 23 年 1 月市町村制の実施により、小屋峠、北梅本、南梅本、苧屋、平井谷、畑中、水尻の 7ヶ村が合併して小野村と称されるようになった。

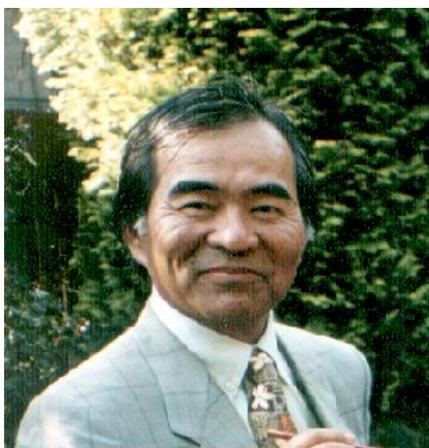
その後、大正 11 年、平井谷、苧屋、畑中の 3 部落を合併して平井部落が置かれたとある。いずれにしても、あまり人口は急激に増えていない様子がかがえる。

このような歴史的背景のなかで、二神がなぜ「畑中」に住着いたのだろうか？ すぐには答えが出そうにないエンドレスな課題である。

役員をつぶやき ☆ ☆ ☆

「想うところを、思うままに」

常任理事 二神 重則



二神島へは小学生の時（昭和30年頃）に学校からのキャンプで行きました。島の学校の教室に蚊帳を張ったことや、水が少なくて汐で米を洗ったことなどの思い出があります。

中学生の2年生でしたでしょうか、美術の先生が二神史朗先生でした。「君も海賊だね」と言われました。私は美術が好きだったのですが、学

習の評価が良かったという記憶がありません。それは、決して先生のせいではありません。

1999年に「二神氏の系譜を研究するための準備会」を立ち上げ、最初の二神島での交流会の日に先生のお宅におじゃまをしました。「昔、君からドジョウをもらった」と言われました。短い時間でしたが40年振りでした。

その長い名前の会は1年という短い時間で「二神系譜研究会」に発展しました。この会に参加されている皆様方のご協力が有ったことと思っています。

準備会から系譜研究会と、様々の人と知り合うことが出来ました。遠方で郵便のみの方、同じ名前の重則さん、若い人とはインターネットで、会の役員の方々、豊田町や玖珠の人達、東京と関西で出会った面々、地域の歴史に興味を持たれている人、図書館・歴史博物

館や大学の先生、……この関係を大切にしたいと思っています。

次は知り合うことが出来ない、ご先祖様の事を。

人並みに親になって願う事は、多くの親もきっと同じで子供の幸せです。私は幸せなことに、その願いの連鎖である、何代ものご先祖様を知ることが出来ました。

イチロク・ザンニ・ロクヨン・イチニツパー……これを言うとお里が知れる。麻雀を知っていますか？ コンピューターは？ 親・祖父母・曾祖父母……と2の倍数で増加します。8代前では256人のご先祖、16代前になると6万人以上のと、計算ではなりません。少し考えました、そうですね、それぞれの母方のご先祖が分かりません。

でも、居たのは居た。知りたい、そう、でも、残念。

現在、島の安養寺の境内に「館の椿」が植えられています。初めて島を訪れる旅人に、二神氏を知ることが出来る唯一の案内です。いつか、私たちの子供や子孫達が、自分たちの歴史を知りたいと思い、この島へやって来た折り。島の文化や歴史と共に、それに答えることの出来る資料館のような物が、欲しいなあと思います。

そう言えば豊田渉さんも前号で記念館の事を書かれていました。

私は一昨年55才で退職し、大工さんになり2回目の夏を迎えました。もしか、その様な資料館の建設が始まったら1枚の板でも打ちに参加できればと、夢、そう希望を持っています。

ここで現の夢から覚めて、二神氏関係の古文書や系図の資料集を作らなければなりません。会報「海の民ふたがみ」を充実しなければなりません。全国の二神にも行ってみたい。近世の二神さんの調べる方法は？……など等。

色々と忙しくしていますが、疑問を解き、夢を追いかけ、親しい人と語りながら楽しくやっています。

昨年、叔父が二神のことを調べていたと知りました。今の「二神系譜研究会」の情報量を知ると、目を輝かすのではなかろうか。従兄弟も20年前にその様なことを言っていた、お盆で帰ってきた彼らに今日までのことを報告しなければ。

河野氏の時代と二神氏

愛媛県歴史文化博物館
学芸課長 石野 弥栄

2001年4月22日 愛媛県北条市ふるさと館
二神系譜研究会総会での講演



はじめに

ただいま事務局長さんよりご紹介いただきました石野です。私は直接には二神系譜研究会（以下「二神会」と記す）の方々を存じあげないんですが、当会と関わりのある方とは知り合いです。平成7年に私の勤めております博物館で「伊予の水軍展」という企画展を開催いたしました。その時、神奈川大学に置かれている日本常民文化研究所から展示資料を貸していただきましたが、その展示の関連として網野善彦先生に博物館で講演をしてもらったことがあります。

また、この会の顧問である法政大学の福川一徳氏は、前からの知り合いです。かつて、佐田岬半島を中心に豊後水道で活躍した三崎水軍について調べていた頃、福川氏が三崎氏の出ている史料（福岡県前原市の弥富文書）の原本を調査されておられたのを聞き、その話をしたところ、快くその情報や史料を譲っていただいたという経緯があります。

さらに、一昨年に愛媛県南宇和郡城辺町で当会の学習交流会が開かれましたが、その時の講師藤田儲三氏は、私の故郷の大先輩でもありますし、博物館の文書講座の講師をお願いしています。また、二神会の発足とほぼ同じ頃に、愛媛県の南部と高知県西部の歴史の愛好家の方々が「南西四国歴史文化研究会」を結成しましたが、藤田先生はその主要なメンバーのお一人でして、私どもいつもお世話になっております。

さて、先日、二神会の会長さんと事務局長さんから、ひとつ二神氏の話しをしてほしいという依頼を受けました。私は以前に『愛媛県史 古代・中世Ⅱ』第二節の中で二神氏のことにも少し触れていましたので、何とかなると軽い気持ちでお引き受けしたのですが、改めて二神氏に関する史料を検討しておりますと、これがなかなか難しく、今は後悔しています。ただ、お引き受けした以上何とかしたいと思っています。

1 河野氏の発展と二神氏

ここで私がお話しするテーマは、風早郡河野郷から発生したとみられる河野氏と防予諸島の一つである二神島から発祥した二神氏との関係です。二神氏というのは、言うまでもなく、村上氏や忽那氏、あるいは三崎氏や法華津氏などの「海賊衆」と呼ばれる、海を舞台に活躍した武士団です。しかし、海賊衆というのは、その名称から受ける印象もあってか、あまりよく理解されていません。

昭和58年に愛媛県文化振興財団が主催した村上氏に関するシンポジウムが開かれましたが、その中で講演された方が海賊衆のことをアウトローとかアウトサイダーとかあぶれ者とか、あまり良くない表現をされていました。たしかに、海賊行為をすることもあるので、その面だけ見ればそういう表現が当たっていますが、合法的に体制内で活動している面もありますから、あまり決め付けないほうがいいでしょう。伊予国の場合で言うと、守護であった河野氏との関係を抜きにして二神氏は語れないのではないのでしょうか。

ここで予めお断りしておかないといけないことは、二神氏に限らずどの氏族に関する研究でもそうですが、取り扱う史料に対して厳しい吟味をする必要があるかと思えます。系図や系譜はそれなりに参考にはなりますが、それを前面に押し出して記述したり語った

りすることは、慎まなければなりません。中世に作成された系図や系譜はなく、かなりの年代を経て後成立したものです。江戸時代に系図作りを業としていた人がいたことはよく知られていますから、系図や系譜を取り扱う場合は、よほど注意してみるべきでしょう。ただ、こういう後世成立の史料であっても、それを作成するとき、確かな材料に基づいている場合はかなり信用がおけます。

例えば、『予陽河野家譜』(巻之一)に河野通信の甥通盛が和田合戦の恩賞として安房国平郡荘を与えられたという記事が見えますが、これなどは相当信用がおけます。それから年代がかなり下がった戦国時代の永禄年間に越後の戦国大名上杉謙信が関東地方に攻め込んだ時に、謙信方に参陣した関東の武将たちの名を書き連ねた記録『関東幕注文』が残っていますが、この中に安房国(現在の千葉県)の河野氏が登場します。鎌倉初期から連綿としてこの地に河野氏一族が領主(地頭)として存続していたことが推測できます。このように、一概に伝承記事を捨ててしまうわけにはいきませんが、この種の記事は史実を曲げたり、誤解していることが少なくないので、鵜のみにすることは危険です。さて、前置きが長くなったので、こゝらで本論に入ります。

河野氏の発展

河野氏が風早郡河野郷地から伊予国の行政の中枢である国衙の所在地(国府、府中)へ進出し、国主に代わって役人たち(在庁官人)を指導する立場(権介)になったといわれています。河野氏は源平合戦で平氏を討った功績により幕府開設後、異例の待遇を受けます。伊予国の守護に任命されたわけではないのに、将軍の家来である御家人の一部を統率する権利を与えられたり、関東の御家人と同様に鎌倉に住んで幕府の諸行事に参加したり、将軍から直接領地を与えられたりしています。ともかく、河野氏は関東の有力御家人に匹敵する立場であったと考えられます。

河野通信は北条時政の女婿になったといわれ、その頃、大きな勢力を築いたと思われます。承久の乱で通信をはじめとする河野氏の大半が幕府に背いて、後鳥羽上皇方に組し、幕府軍と戦って敗れ、没落したことはよく知られていますが、ただ通久(通信と時政の女との間に生まれた子)流の河野氏だけが残存したというイメージがあるのはいかがなものでしょうか。河野通信の嫡子という通政の子政

氏流は、美濃河野氏になったとみられるし、時宗の開祖一遍は河野氏支流別府氏の出です。この地にも得能氏や信濃河野氏となった通末流など残存した河野氏は少なくありません。

鎌倉時代後期、いま NHK の大河ドラマとして放映されている北条時宗が活躍した頃、有名な元寇(蒙古襲来)が起きますが、そのとき河野通有はじめ河野一族が活躍し、その恩賞として九州に大規模な領地を与えられ、異例の待遇を受けます。通有は早く九州から帰国してその討伐をするように命じられています。それほど河野氏にとって九州の領地は大切であったし、一面では配下である瀬戸内の海賊を討ちたくはなかったでしょう。

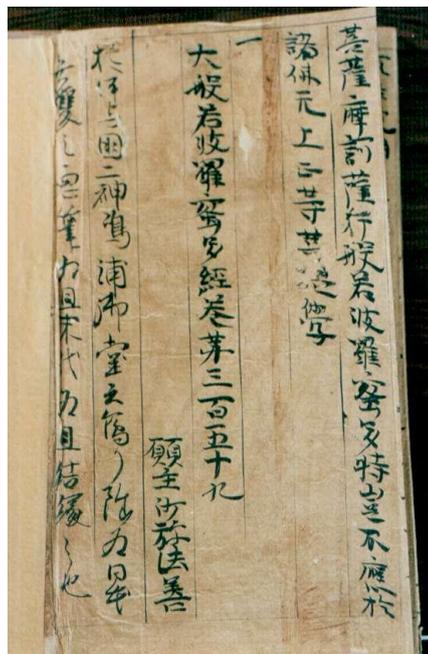
南北朝時代には河野氏はさらなる発展をとげます。鎌倉幕府が倒壊したときには、幕府方として上洛し、敗れて没落していた通盛は、その後、建武政府に背いた足利尊氏に従って各地を転戦して非常に手柄を立てたので、幕府成立後、伊予国の守護に任命されました。ところが河野氏の前に立ち上がったのは、四国全域の支配権を尊氏から委任された足利氏一門の細川氏です。南北朝後期に河野氏は細川氏と対立を深めて戦い、通朝、通堯(通直)の2代続けて戦死しました。ようやく幕府の庇護により河野氏は細川氏と和睦して、通義(通能)以後、代々伊予国の守護となり当国を統治しました。

二神氏前史

河野氏が台頭し、発展していった鎌倉時代から室町時代には、二神氏は確実な史料上に登場せず、いわば「二神氏の前史」とでもいふべき時代であったと考えられます。

二神島の安養寺に伝わる大般若経は何度も修理されていますが、元徳2年(1246)にも修理されています。その時の奥書に「二神嶋住人沙弥法善」とみえますが、二神氏の祖とみられます。二神氏は長門国の豊田氏が二神氏になったということになっていますが、おそらく事実でしょう。

二神島の近くにある忽那島の場合、藤原道長の末裔の親賢という人物が忽那島(奈良時代には骨奈嶋とも記される)に配流されて土着し、忽那氏になったということが『忽那嶋開発記』という江戸



時代に成立した史料に記されています。親賢という人は他に全く登場しないので信用はおけません。二神氏の祖豊田氏は長門国の郡司級の豪族で確かな足跡を残しています。長門国から伊予国へ移住した契機ははっきりしませんが、網野先生は地頭になって来たのではないかと推測されています。

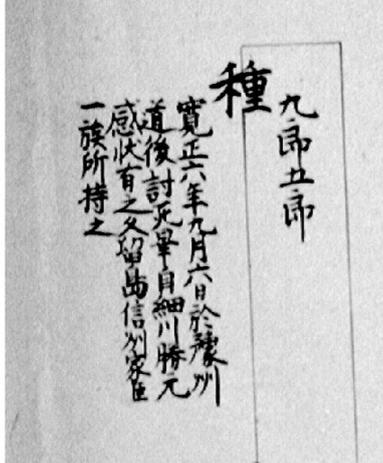
『予陽河野家譜』や『予章記』という河野氏の家譜に「今岡陽向軒之家伝之記録」が引用されて **法善の名前が見える大般若経** がありますが、その中に河野通堯の配

下に交じって「二神十郎左衛門」が登場し、瀬戸内海各地の武家方の拠点の攻撃したとあります。この引用史料は当時のものではなく、戦国期以降のものでしょうから、南北朝後期に二神氏と称していたか否か定かではありません。

確かに二神氏を名乗ったのは、先にみた安養寺大般若経に見える(二神長門守家経)がその初見で、室町中期でしょう。『忽那嶋開発記』の長禄3年の記事に「豊田弥三郎事、二神嶋住宅願、正岡信濃守云々」とあり、また享禄3年の記事に「二神嶋豊田弥治郎殿」宛の河野通宣の文書があったと記されています。前者は忽那家文書に残っておらず、その表現のしかたからみて、近世以降の記述でしょう。後者は同年の文書が実際に忽那家文書に残っていて「二神弥治郎先知行分」と記されていますから、戦国時代には明らかに二神と名乗っていたことがわかります。

やはりこれは、『忽那嶋開発記』の編者が意図的に書き換えたともみてよいでしょう。ただし、浮穴郡の国人領主大野氏の場合をみても、大野氏は本来三河国伴氏の出自で、三河国富永保(荘)に拠って富永氏を称しますが、伊予へ移住してのちも大野とも富永とも名乗っている例がありますから、二神氏も移住してしばらくは、もとの姓(豊田)と新しい姓(二神)と両方を称していたことはあったでしょう。





豊
田弥三郎の名前が見える忽那島開
発記

室町期河野氏の分裂と二 神氏

二神氏の系図(豊田二神藤原氏子孫系図・二神系図抄本)を見ておりましたら、「種」という一字名の変った名乗りの人物が目にとまりました。この人物は寛正6年(1465)9月6日(16日か?)に伊予道後城で討ち死にして細川勝元から感状を与えられています。(感状を貰ったのは、種の子息か)。前にお話したように系図中の記事は、かなり検討を要しますが、以前検討したことがある大野氏の事例から見ても、現存する文書が系図中に引用されており、信用がおけます。

とくに、二神氏にとって必ずしも有利ではない細川氏のことを書き留めているのは、かえって信用に足るものです。この感状がそのまま引用されていないので、具体的なことはわかりませんが、二神種が細川氏に通じて河野氏に背き、重見・南・得能などの反乱軍と細川軍の拠る湯築城に籠り、河野通春に荷担する周防の大内氏(政弘)の大軍の攻撃を受けて敗れ、戦死したと推測されます。河野氏は通久(惣領家)と通元(庶家)、教通(通直と改名、通久の嫡子)と通春(庶家、通元の子)と二代にわたって対立、抗争を続けましたが、応仁の乱の少し前に細川氏が勝元、賢氏と連続して伊予守護に就任すると、河野氏は内争をやめ、一致して細川氏に対抗したのです。細川氏は幕府に働きかけて河野氏を反乱軍とみなし、大内氏などの幕府軍を伊予へ派遣したのですが、かえって大内氏が河野氏を援助して細川軍を攻めたので、細川軍は敗北したのでしょう。二神氏が細川氏に属したのが事実だとすると、同氏が河野氏に背いて反乱軍に組したとみられます。

2 河野氏の領国支配の進展と二神氏

応仁の乱が終わって、文明年間以降二神氏はにわかに確かな史料

上に登場します。文明14年(1482)に河野氏宗家の通直に対立していた通春が死去してからは、庶家の勢力は衰退します。その前年に通直は石手寺を再建していますが、そのときに棟札に通直のことを「伊予屋形」といっていますので、この頃すでに河野氏惣領家が伊予国の支配権をほぼ確立したといってもよいでしょう。二神氏は、この通直以後、弾正少弼通直、晴通、左京大夫通宣、通直(幼名牛福丸)と歴代の河野氏当主と関係を持ちます。これは、二神文書、片山二神文書によって判明します。(終わりの表を参照)。その他、神奈川大学に置かれている日本常民文化研究所が所蔵する二神文書のうちに、税(夫役)を賦課する土地台帳が幾種か入っており、民俗学者の故和歌森太郎氏らがこれらの文書を見て、メモを残されています。この一群の文書は『愛媛県史』の資料編に収録されていなかったもので、のちに『伊予史談』で新出二神文書として翻刻して紹介されています。

《伊予国守護河野氏から知行安堵、宛行、官途、仮名授与等を受ける》

戦国時代、河野氏は家臣である領主たちに対して領地を認めたり(安堵)、新たに領地を与えたり(宛行)しています。その他、「守」(受領)等の官途を与えています。本来、受領などの官途は、幕府が朝廷へ推挙して授与されるものですが、しだいに各地の守護が代行して独自に家臣に与えるようになって、この制度は形骸化します。また、武士は幼い頃は、藤二郎とか弥次郎とかいう仮名(けみょう)を称していますが、成人すると、実名を名乗ります。このうち一字は先祖代々受け継ぐ通字を付けます。

二神氏の通字は「種」で、豊田氏以来のもので、他の一字は偏諱「へんき」といって主君や烏帽子親(成人式に冠を被せる役)の一字(下の字を与えるのが一般的)を貰います。したがって、実名が途中で変わっている場合は、主君が変わるなど状況の変化があったとみてよいでしょう。二神氏の場合、実名が史料の上に出ていませんが、系図に見える「通範」は、おそらく河野氏の家臣となり、河野氏の通字である「通」の字を授与されたのでしょう。二神氏の通字である「種」を名乗りに付けていないので、河野氏よりの人物だったのでしょう。最近、二神通範夫妻の画像写が河野氏の古い菩提寺の善応寺(北条市)から発見されているのは、これを裏付けるものでしょう。

河野氏はこのように知行安堵、宛行、官途・仮名授与等の手段で家

臣を臣属させたのですが、二神氏の場合はどうでしょうか。（記事末尾の表・地図を参照してください）。まず、二神氏は二神島を本拠地としますから、二神島での権益を持っており、天文20年(1551)に二神兵庫助が河野弾正少弼から「二神嶋作職」を安堵されています。この「職」(しき)というのは、中世前期、荘園制度が盛んな頃、役職に付随した権益を意味しており、「作職」というのは、農民などが持つ耕作権などの低いランクの職でしたが、しだいに地主権と同一視されて武士(領主)でも保有するようになります。戦国時代の「職」はあまり実態を意味するものではなく、古い時代の職の系譜をひくといわれています。ただ、新出二神文書によりますと、二神島に河野氏配下の有力な水軍である村上氏や今岡氏の知行分がかなり検出されますので、同島における二神氏の権益はかなり制限されたものと思われます。こういう傾向は忽那島でも見られますから、河野氏の家臣団統制の政策のあらわれではないでしょうか。

その一方で二神氏は、河野氏から伊予本土、風早郡に安岡名、宮前(崎)分、友兼名、迫、栗井三分、高田儀公分、正岡東分、風早郡御手作分、栗井郷反(段)役職、河野郷役職など多くの所職・所領を宛行、安堵されているのが注目されます。その他、和気郡、越智郡にも領地を与えられていますが、このように遠隔地に領地を与えられるのは、二神氏にかぎらず、他の河野氏家臣にも見られることです。ともかく、二神氏が風早郡本土に多くの領地を持つとともに同郡における河野氏直轄領の代官などの役職に任じられていますから、河野氏からみれば外様の存在であった二神氏が、河野氏家臣団のなかで重きをなしてきたことがわかります。

二神氏における「衆」の形成と役割

二神氏は風早郡で多くの領地や強力な権限を与えられましたが、もう一つ注目すべき点は、二神氏において「衆」が形成されていることです。永禄13年(1570)に来島通康の死後、来島氏の当主となった牛福丸(のちの通直)が室町将軍(足利義昭)に背いたため、河野氏は二神氏に来島牛福丸への対面禁止、風早郡における新領地の給与の約束を命じています。これは、来島村上氏を牽制するためにとられた対抗策とみられますが、それだけ二神氏の持つ重要性が伺えます。このとき河野氏から二神氏へ発した同文の命令文書が二神修理進、同隼人佐、宅並衆中に宛てられていることは重要です。



宅並山城

当時、二神氏が大きく三流に分かれていたことが知られます。とくに「宅並衆中」というのは、和気郡と風早郡との境目付近の海辺部にあった宅並城を防衛する二神氏の集団です。河野氏は久田子衆、鹿嶋衆など島嶼に設けた海城に拠る海賊衆を統制していた形跡がありますから(忽那家文書)、この城もそれに類するものでしょう。宅並衆がこのような軍事的に河野氏から組織される面があったことは否めませんが、そればかりとは言えません。二神の諸氏に上記の命令が下された直後、河野氏(牛福丸、のちの通直)は、二神隼人佐、同修理進にそれぞれ同文の文書を出して粟井内の領地を安堵していますが、それには「衆中可申談也」という文言が付されており、二神各氏と宅並衆との一族内部の結束が垣間見えます。宅並衆が、河野氏の本拠湯築城を海からの攻撃を守る役割の一端を担うと同じに、宅並城の背後、粟井川沿いに所領を集中的に与えられているのは、湯築城の背後に続く陸上の要衝を守る役割を持っていたことを意味するのではないのでしょうか。

なお、「南行雑録」に収める「河野弾正少弼通直御下之衆少々記」という記録に6人の二神氏が「難波衆」という軍事集団の中に見えます。ただし、この史料は天文年間の河野氏の軍事組織をある程度反映しているとは思いますが、検討を要するところもありますので、ここでは紹介するだけに留めておきましょう。

二神氏のゆくえ

さて、以上で私の与えられたテーマのお話は終わったのですが、一つだけ追加させていただきます。二神氏は河野氏に属して存続したのですが、豊後の戦国大名大友氏に接近し天正年間に豊後国内で

「津々浦々万雑公事」免除の特権を与えられた二神氏(修理進)がおり、二神氏のうちで同国に移住したものも少なくなかったといわれます。また、来島氏が豊後玖珠郡の森藩主に移封されると、それに従ってかの地へ渡った二神氏もかなりいたようです。この二神氏も主君の来島氏(のち久留島氏)に倣い、高野山上蔵院を宿坊とし、高野山参詣をしたり、先祖の位牌を同院に納め供養をしています。二神氏は豊後へ赴く少し前、天正16年(1588)7月13日に二神主殿助の妻がその亡夫とみられる高月妙光のために日牌供養を依頼しています。(高野山上蔵院原蔵「河野家過去帳」)

二神氏に対する所領安堵・宛行、官途・仮名授与等

年 代	発 給 者	被 給 者	内 容	典 拠
文明11・12・13	河野通直 (河野教通)	二神四郎左衛門尉	粟井安岡名、同友兼名、宮崎分の当知行分の宛行。	二神文書 (県史1486)
文明13・8・6	高山通貞	二神左衛門四郎	風早郡内湖手分反銭(要脚)、文明8年分の納入に対する請取り。	二神文書 (県史1499)
文明18・3・26	重見通昭	二神式部丞	二神道金入道跡目惣領職の安堵	二神文書 (県史1530)
長享3・2・5	河野通直 (河野大輔)	二神藤左衛門尉	二神豊前守跡の相続を隼人佐に許し、同所領の安堵を藤左衛門に通達する。 兼文中の文言や不審 (写)	二神文書 (県史2110)
永正17・10・26	河野通直 (河野少輔)	二神藤次郎	河野教通(通直)の判形(安堵状)に倣い、粟井安岡名、同友兼名、宮崎分等を安堵する。	二神文書 (県史1625)
年不詳	河野通直 (河野少輔)	二神藤次郎	二神藤次郎を左馬助に任じる(官途書出)。	二神文書 (県史1628)
天文11・3・28	河野晴通	二神弥五郎	先例に倣い安岡分、宮前分、友包(兼)入地を宛行。	二神文書 (県史1718)
天文13・11・16	河野通直 (河野少輔)	二神弥五郎	二神弥五郎を兵庫助に任じる(官途書出)。	二神文書 (県史1745)

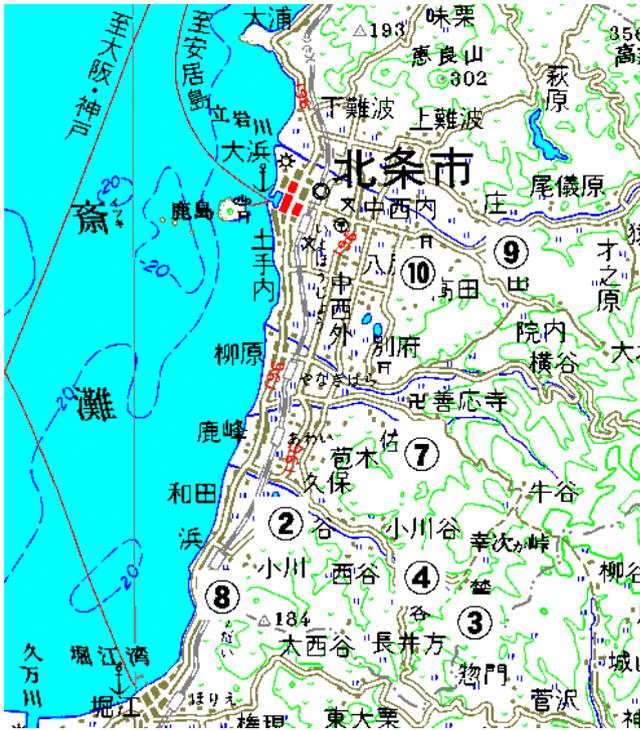
天文14・2・28	河野通直 (幕正少将)	二神兵庫助	河原分一所1町を松末和泉守の知行に 倣い、宛行う。	二神文書 (県史1748)
天文14・6・16	河野通直 (幕正少将)	二神左衛門 尉	忽那大浦八幡宮神主職の充行。	二神文書 (県史1749)
天文14・6・1	河野通直 (幕正少将)	二神兵庫助	粟井庄内安岡分、宮前分、友包(兼) 分を選補する(充行)。	二神文書 (県史1750)
天文14・6・1	河野通直 (幕正少将)	二神系右衛門尉	河原分(正崇寺その他寺社等所領を除 く)の宛行。	片山二神文書 (県史1751)
天文15・7・1	河野通直 (幕正少将)	二神隼人佐	親父信濃守の領知した跡と所従を宛行 う。	片山二神文書 (県史1753)
天文16・3・18	河野通直 (幕正少将)	二神源三郎	和介(気)郡内の1町を申し付ける(宛 行)。	二神文書 (県史1759)
天文20・2・28	河野通直	二神兵庫助	三神補作職を親父左馬助の知行に倣い 安堵する。	二神文書 (県史1773)
天文21・8・28	河野通宣 (左京大夫)	二神左衛門 尉	粟井郷反役職を申し合わせる(宛行) 。	片山二神文書 (県史1779)
天文21・9・28	河野通宣 ※通宣と書き異なる	二神左衛門 尉	粟井郷反役銭を先例に倣い申し合わせ る(安堵)。〈写〉	二神文書 (県史2110)

二神氏の所領・所職等

天文21・11・17	河野通宣 (左京大夫)	老幼二神衆中	鴨部郷新田分(新田弥九郎知行分の代所)を申し付ける(宛行)。	片山二神文書 (県史1780)
天文21・11・18	河野通宣 (左京大夫)	二神源三郎	久枝郷内の友近名を申し付ける(宛行)。	二神文書 (県史1781)
天文21・11・24 (兼正少輔)	河野通直	二神兵庫助	二神源三郎分を宛行う。(写)	二神文書 (県史1783)
永祿6・1・18	河野通宣 (左京大夫)	二神弥五郎	二神弥五郎を左馬助に任じる(官途書出)	二神文書 (県史1902)
永祿13・12・1	平岡房実 垣生盛周 (河野氏奉行人)	二神修理進	河野郷役職を各々へ仰付ける。土屋分、秋光分、田坂神助分、正岡東分、粟上分、難波と正岡間で50貫分等を進じる(宛行)。※二神隼人佐、宅並二神衆へも同文の河野氏連署奉書が出される。	片山二神文書 (県史2106・2107)
永祿13・12・13	河野牛福 (のちの河野通直)	二神隼人佐 ※二神修理進を指す	迫、粟井三分25貫を安堵する。	片山二神文書 (県史2109)
永祿13・12・15	河野牛福 ()	二神修理進	迫、粟井三分25貫を安堵する。 (写)	二神文書 (県史2110)
元龜2・3・4	河野牛福 ()	二神左馬助	高田儀公分を申し付ける(宛行)。 (写)	二神文書 (県史2112)
天正8・1・25	河野通直	二神相生	河野通直、二神相生(丸)に仮名弥五郎を授与する(仮名書出)。	二神文書 (県史2244)



- ①二神島作職
- ⑤鴨部郷新田分
(越智郡)
- ⑥久枝郷友近名
(和氣郡)



- ②安岡名
- ③宮前 (宮崎) 分
- ④友兼 (友包) 名
- ⑦迫
現在の佐古か
- ⑧粟井三分
- ⑨高田儀公分
- ⑩正岡東分